

風を習ひ度いと言つて、眞剣で働いてゐるのに、お前が離縁されて来たのは、宮子さんを俊夫の嫁に、貰はなかつた爲とのみ思ふ邪推から、罪もない好枝を憎んで、無理にもうちから、逃げ出させようとするために、あれのする事成す事、善かれ悪かれ皆非難して、あれを虐げて来た事を考へて見ると、本當に怖ろしい恥づかしい事ではなかつたか……ねえ和子、よく考へて御覽。

もしあの子が自分の娘であつて、私がそばでそんなに、理不盡に虐められるのを見てゐるとしたら、どんな思ひがするだらう。

屹度身も世もない思ひがして、その場から連れて歸つて終ふものを……。

好枝は毎日、どんなにお前が厭な事を言つても、ちつとも悪い顔をしないばかりか、在所へでも唯の一口も、そんな事を書いて出してゐないから、親達始めみんなが安心して、幸福をしてゐると言つて喜んで、頼む／＼と言つて手紙を寄越して居られ、遠い所に離れて様子も分らないし、どうする事も出来ないにしても、親の心はみんな同じだから、私がお前や俊夫や幸夫を思ふ通りに、好枝のお父さんやお母さんは、寢ても覺めても、あれの事を案じて、幸福である様に祈つてゐらつしやるに違ひないのに

自分の事ばかり考へて、人の親の心持を思ひやる事の出来なかつた私は、何といふ愚か者だつたらう。私がこんな情ない性質だから、お前にまでその性質を生みつけ、又見習はせて我儘な行をさせるかと思へば、本當に私は自分の身が、たまらなく恥づかしく思ひます。お母さんはこの間からの生活で、本當の好枝の眞心を見る事が出来たので、始めて迷ひの夢が覺めました。

お前もどうか眞心にかへつて、優しい親切な、淑やかな娘となり妹となつて、今迄の數々の罪の償ひとして、常に心掛けてあれを助けてやつてお呉れ。

さうすれば假令黒瀬の家へは歸れないで、愛子と一緒に暮す事は出来ないにしてもそれ以上の幸福が、巡つて来るに違ひありません。

これからの心掛次第で、どんな幸運でも向いて来るんです。私が頼むから、これから決して好枝に厭な事は言はず、姉は姉として敬ひ、親切にしてやつてお呉れ。

今迄私やお前が、あれ程意地の悪い事を言つてさえ、何も言はずに辛抱して来た程の好枝だから、私やお前が心を入れかへて、本當の娘と思ひ姉と思つて、打融けて親しんで行けばあの子はもつとく優しい親切な嫁となり、姉となるに決つてゐます。



と物の道理を説きつけて、涙ながらに和子に言ひ聞かせると、長い間自我の煩惱に迷つて、愛慾と嫉妬、憎悪心の夜叉となつて、半ば病的になり切つてゐた、和子の眞心も、眞實の母の慈愛の涙が通じると、言ひ知れない大きな、一種の閃めきが心に起つて、その邊りにゐても立つてもゐられない様な感じがして來て、

「お母さん 私暫く寝かして下さい。」

と言つて、矢庭に布團を出して、頭から深く被つたまゝ、一人で泣いてゐて、何時までたつても起きて來ません。隣室にゐて、そんな事があつたとは夢にも知らない好枝は、用事のために次の間へ來て見ると、和子が寝てゐるので、吃驚して

「お母様、和子様は何處か、お加減がお悪くてゐらつしやいますか。」

「なめに別に、一寸頭痛がすると言ふから、お寢みと言つて、寝かした所ですよ。」

「まあ、それはお悪い事でございますわね。」

餘程お悪いようでございますか知ら？」

と言ひ乍ら、和子の傍へ行かうとするので、茂子はあはて、

「大した事じやないんだから、放つておいてお呉れ、すぐよくなるから……。」

と言つて止めましたが、好枝はそのまゝ身を退いては、すまないと思ひましたので夜具に一寸手をかけて、

「和子様、お氣分がお悪いさうでございますが、如何でございますか。」

と言つて聞くと、和子は突然大きな聲を出して

「姉さん、私が悪いんですから、放つておいて下さい、私は姉さんに申譯がない……」

姉さん許して下さい、私は何といふ馬鹿だつたでせう。

罪もない姉さんを、長い間苦しめて……。」

と泣き乍ら言ひますので、好枝には何が何だか、さつぱり分りませんが、自分に向つて堪忍して呉れ、許して呉れと言つては、泣く様子から見れば、今迄の様に自分に悪意を持ち、反感を持つてゐるのではない事は、はつきりと分りました。

それと同時に和子の心に、何か大きな變化の起つた事を知ると、好枝は堪らなく嬉しくなつて、

「まあ和子様、何を仰有いますの、何にも御心配はございませんわ。」

すぐにお樂になりますから、お氣を鎮めてお休み下さいませ。



餘り色々御心配下さいましたら、屹度御體に障つたのでございませう。  
病人の方は私が引受けて、お世話を致しますから、御安心してお休み下さいませ。  
貴女にまで御病氣になつて頂きますと、お父様やお母様が、又ごんなに御心配なさ  
つて下さいますか分りせんから……。」

と言つて、思はず袖を顔に當て、泣き出して終ひました。

それを見ると和子は、突然半身乗り出す様にして、好枝の兩手に縋りついて、

「姉さんこそ、餘り無理をして御病氣にならないで下さい。」

お父さんやお母さんも、ごんなに心配するか分りません。」

と言つて、唯譯もなく泣き出して終ひました。

それに釣り込まれて茂子も好枝も、一頻りすゝり泣きを續けました。

ふと氣がつくと、隣の病室では俊夫が、

「おい 好枝！ おい。」

と呼んでゐる聲がしますので、好枝は慌て、涙を押し拭ひ、寢臺の傍へ行くと、俊夫は好枝の顔を見て、

「好枝！ お母さんや和子は、どうして泣いてゐるんだ？」

と弱い聲で苦しうに尋ねました。

好枝はさう聞かれると、胸一杯に迫つて来る嬉し涙をきつと押へ乍ら、

「お母様や和子様は、私の體を心配して下さいまして、病氣になつてはいけなから  
氣をつけよと仰有つて、御親切に仰有つて下さるものですから、餘り私勿體なくて  
思はず泣いて終ひましたの。」

さうしたらお母様も和子様も、一緒に泣いて下さいましたのでございませう。」

「そうか、それは本當か、それは有りがたい。」

お母さんや和子が、本當のお前の心持を、知つて呉れたんだね。

良かったね好枝！ 本當に有りがたい事だよ、これでお前も僕も、うち中の者みんなが、救はれる事が出来るんだ。

みんなの迷ひがさめて、みんなが眞心にかへつて、一家が圓滿に治るためにだつた  
のなら、僕の今度の病氣は、嬉しい犠牲だつたね。」

と唇を震はせ乍ら、感慨無量の思ひで、さう言つた時、そこへ茂子が入つて来て俊夫



と顔を見合せるご、俊夫は感極つて、

「お母さん……。」

「俊夫……。」

と二人は手を取り合つて、暫くは言葉もなく、啜り泣いてから、俊夫、安心してお呉れ、私も和子も長い間の迷ひから覺めて、昔のまゝの心に歸りました。

これからは決してお前にも好枝にも、今迄の様な苦勢はさせないから、安心して早く快くなつて、今迄の苦しみを取り返すほど、うち中仲よく、幸福に暮しませう。」

「お母さん、僕はお母さんが、和子に對する深い恩愛から、迷ひ込まれた夢路から覺めて、昔世間から賞められた時の様な、理智に明るい、人情に富んだお母さんに歸つて下さる日を、心で一生懸命祈つてゐましたよ。」

「本當に私が悪かつた、許してお呉れ。」

私達の迷ひを救ふために、別居して行つたお前たちを憎んで、うちに有り餘る程ある夜具さえ送つてやらないで、意地ばつてゐた私は、ほんとうに何といふ親甲斐もな

い馬鹿だつたでせう。その癖お前が寒くはないか、風邪を引きはしないかと、寝た間も忘れず案じ通してゐた愚かさは、何にも譬へようがない。

かうした病氣にお前がなつたのも、原因はと言へば、私の罪なのだ。

布團もなしでこの大寒の中に、二人共そんな寒い思ひをした事でせう。

幾ら意地になつてゐたと言つても、親なら私は、何故布團位は持つて行つてやる氣になれなかつたのでせう。」

と啜り泣けば、

「お母さん、その有りがたいお言葉だけで充分です、もう何も言はないで下さい。きつと好枝も喜んでゐるでせう。僕も日本晴れがした様な心持がして、嬉しくてくたまりません。僕は今度よくなつたら、好枝にもよく言ひ聞かせて、お父さんにもお母さんにも、一生懸命孝行をしますよ。」

と言つて、そこでも又三人は、暫く泣き續けました。

長い間 蟠つてゐた憂鬱陰險な暗雲が奇麗に取り除かれて、お互の眞心が澄み渡るご、今迄とは丸つきり變つて、見るもの聞くもの、總べてが皆懐しく美しい者に見え



出して、お互の身を案じ合ひ慰め合つて、情に満ちた朗かな聲が、病室の内に充ちま  
すど、まだ體の自由は利かないながらも、俊夫は堪らなく嬉しさを感じて、病氣の事  
も忘れて微笑み、様々の事を想像し、又將來の理想を描いて、ゆつたりとした氣持に  
なるのでした。かくて無上の感謝感激に包まれ乍ら、その夜は次第に更けて參りました。  
好枝に暫く宵の中だけ、寝む様にと俊夫も茂子も頻りに勧めますので、好枝もその  
言葉に背くのは、却つて悪いと思ひましたゝめに、始めて俊夫の寢臺の下に、床を伸  
べて横になりましたが、長い間少しも眠らなかつたためと、思ひがけない今日の出来  
事から受けた喜びの興奮とが、一緒になつて、目は閉ぢてゐても、どうしても眠る事  
は出来ませんので、一年間の過去の生活を思ひ、遠き故郷の懐しき山川、父母祖父母  
や兄弟の事を果しなく、次から次へと幻に描いてゐる中に、纏て十時も打ち十一時も  
過ぎて、十二時が參りましたので、好枝は早速床を脱け出して、

「お母様、有りがたうございました。」

「私が代らせて頂きますから、どうぞお休み下さい。」

「いゝえ、好枝！ もつとお休み、一時間や二時間位寝たつて、疲れのとれるもので

はない。今夜は俊夫も大變樂だから、朝まで私が世話をするから、安心して朝まで、  
ゆつくりとお休み。」

「はい有りがたうございます、でも私……馴れて終ひましたから、そんなに長く眠  
られないのでございます、これからは私がお世話を致しますから、どうぞお母様お  
休み下さいませ。」

と無理に強ひられて、

「それでは私暫らく休ませて貰つて、又起きて代ります。」

と言つて好枝の休んでゐた布団の中へ入つて、寝やうと致しましたが、どうしても眠  
る事が出来ませんので、様々の事を考へて居りました。

その中に何時の間にか、うごく／＼としたと思ふと、時計はチンチンと二時を打ちま  
した。その音にふと目を開けて見ると、寢臺の傍にゐる筈の好枝の姿が、見當りませ  
んのので、不思議に思つて頭を上げて、その邊りを見廻すと、好枝は向ふ側の壁に、觀  
音菩薩の掛軸をかけて、その前にお蠟燭を點して、きちんと座つて合掌して、何事か  
小聲でお祈りをしてゐます。



その姿は如何にも莊嚴で、何となく自分の體まで晴れ々とする様な感じが致しますので、思はず茂子は自分も床の上に、静かに起き上つて、好枝にも俊夫にも覺られない様に、観音像に向つて合掌して、禮拜致して居りますと、何とも言ひ様のない、有り難さ勿體なさ、莊嚴さがしみんと身に感じられ、身も心も清まる思ひが致しましたので、思はず兩手をついて、伏し拜みましたわ。

聽て手を上げて、尙も拜んで居りますと、暫くしてお詣りをすました好枝は、お燈明を消し、掛軸を外して、巻き納めて終つて、立ち上つてこちらへ振り向くと、

「あつ？ お母様、まあ起きてお出でございましたの？」

と聲をかけましたので、茂子は好枝の顔を眺め乍ら、

「私ふと目が覺めたら、お前がお詣りをしてゐたから、私も起きて一緒にお詣りをさせて貰つてゐました。」

「まあ、さうでございましたか、私一向に存じませんでしたので、お母様に後を向けて居りまして、本當に失禮致しました。」

「そんな事ちつともかまひませんよ、あんたが今拜んでゐた観音様は、ごういふ観音

様なの？」

「あの観音様は、私がこちらへ貰つて頂いて來る時に、叔母が朝晩信心して、お功德を頂けと言つて、下さつた観音様でございます。」

「まあさうかえ、さうだつたのかえ。」

「お母様は何故そんな事を、仰有いますの？」

「どうかだつたのでございますか。」

「いゝえ。何て事もないけど、その観音様は餘程御利益の靈かなお方の様だわね。」

「はい、本當に靈かな観音様でございます、私何時でもこの観音様に向つて一心にお祈りして居りますと、何時の間にか、自分の體が、観音様のお手許へ、引き寄せられて、御胸の中へ吸ひ込ひれる様な、有りがたさ嬉しさがこみ上げて來ます。」

それでございますから、毎日どんな悲しい事も苦しい事も、淋しい事がありましたも、この観音様のお姿を、目の前に思ひ浮べて、口の中で二三回観音様の御名を唱へますと、苦しいとか悲しいとか、淋しいとか思つた感じが取り去られて、すぐに安らかな嬉しい幸福な氣持が、體一杯に満ちて參りますの。」



茂子は好枝の腫をじつと見凝めてみました。ぼんと膝を打つて、

「あゝ好枝！ 今こそ始めて分りました、お前が人から何と言はれても、腹も立てず顔にも出さず、にこ／＼して居られたのは、故意や意地からではなくて、本當の菩提心があるからだつたね。御父さんがそんなに云はれた事がある。

それを知らないで私達は、お前を無神経だと思つて見たり、強情だと思つて見たり意地だ故意だと思つてゐましたが、今こそはつきりと分りました。

本當に信仰を持つといふ事は、大切な事です、信仰のない者は、本當に一寸した事にでも、すぐに我儘が出て、横車を押さうとして、自分も苦しみ人も苦しめ、迷惑をかける事が多いけれども、本當の信仰があれば、何事も因縁だとして諦めて、佛心で人の罪も許し、どんな艱難にでも、耐え忍んで行く力が出来るから、人間には本當の信仰がなくてはいけない。

ほんとうにお前は、強い信仰を持つてゐて、毎日心に平和な生活が出来て結構だよ。私もさうだけど、和子にもこれからは、成るべくつまらない事の方には、趣味を持たせない様にして、いゝ人を選んで道を説いて頂いて、信仰の方面に導いて、魂を救

つてやつて頂かなければ、この先どうなつても、不幸をすると思ひます。」

「本當に信仰はお持ちになつた方が、結構だと思ひます。

信仰がございまして、いつも自分は神様や佛様と一緒に、住ませて頂く心持でゐられます。そんなお話を聞いても、又どんな物を見ましても、みんな美しく見えたり聞えたり致しますから、何も彼もが勿體なくて、假初にも不満を言つて見たいとか、腹を立てるといふ様な事は、出来なくなつて終ひます。

それは神様や佛様は、片つ端からそんな氣持は、すつかり取り除いて、幸福と平安をお與へ下さつて、心を明るい方に導いて頂ける、お蔭だと思ひます。

私心でお祈りしないでは、一日も生きてゐられない様な氣が致しますの。」

「本當にさうだらうね、好枝！ お前和子にも、又その觀音様を、時々拜ませてやつてお呉れ。」

「はい、およろしければ、何時でも拜んで頂きます。

私がこゝを退院致しましたら、和子様がお祈りをなさると仰有いましたら、差上げましてもよろしうございますから……。」



「それではお前が、お詣りする事が出来なくなるから、和子に全然やつて下さらなくても、一緒にお参りをさせてお呉れたら、それでいゝんですよ。」

「でも私は又、叔母に頼んで迎へて頂けば結構でございますから、此の観音様は特別に、お母様が靈かだと仰有つて頂いた程の方ですから、同じお姿でもこの観音様を、差上げた方が、餘計にお心持がおよろしいではございませんか。」

「それは本當にさうだよ、私は何だかその観音様に、深い因縁がある様に思ひます、お前が観音様を信仰して、お助けを受けてゐる様に、和子の心も救つて頂くためには同じ事ならばお前の眞剣でお詣りしてゐる、その観音様を頂けたら、そんな有りがたい事はないんだけれど……。」

「それならお母様、退院致します時に、和子様へのお土産に、この御掛軸を持つて行つて差上げませう。」

二人がこんな話をしてゐる時、次の間に寝てゐた和子が急に、

「お母さん、く。」

と大聲で呼びかけますので、二人は驚いて、

「はい！ ごうかしたのですか？。」

と言ひながら、急いで行つて見ると、急にお腹が痛くなつたと言つて、苦しがつてゐますので、二人は一生懸命に色々、世話を致しましたが、段々とひどく苦しみますので、好枝は急いで主治醫の所へ行つて、頼んで診察を受けますと、急性盲腸炎だとの診断でした。二人は夜明けを待つて、すぐに實家へ使ひをやつて、昭博に知らせ、好枝は道枝に電話をかけて呼び寄せ、みんなが手を盡して手當てを致しますと、注射のお蔭で劇しく病むのだけは止りましたが、却々の重態ですから、又も別の病室へ入つて、茂子が付き切りで看護を致しました。

さうして四日目の日になると、大變よろしいので、この分なら實家の方で静かに養生させた方が、無駄な費用もかゝらないから、よからうといふ相談になりましたので、俊夫の事は一切好枝に委せて、茂子と昭博は和子を静かに自動車に載せて、實家へ伴れて歸つて、懇ろに介抱致しました。それまで二三日、嵐の様に騒がしかつた病室も和子をつれて茂子が歸つてからは又もとの静けさに歸りました。

物の調子が旨く行く時には、何事も工合よく運ぶもので、俊夫が入院當時知らせに



よつて、急いで見舞に駆けつけて来た、好枝の父の正雄のゐる前で、茂子が好枝の事を様々に、澤山の親戚、近所の人、看護婦、醫師などのゐるのもかまはず、罵り恥づかしめたのを聞いて、正雄は身を裂かれるよりも辛く悲しく感じて、男泣きに泣き乍ら、余りと言へば惨酷な母の仕打に、腹を立て、俊夫の病氣さえ少し工合がよくなれば、假令昭博が反対しやうと、俊夫が何と言はうと、そんな事はかまはず、好枝を引き取つて終はうと決心して、その心持を宮崎夫婦に話すと、二人は代る／＼今日までの事情を物語つてから、

「兎に角今俊夫さんの大病の時に、そんな話は出来ませんから、ごうするにしても全快した上の事にしないと、話は始められません。」

「何にしても話は大変難しいのです。」

お父さんと俊夫さんは、絶対に離縁しないと云つて見えるし、お母さんと娘さんは是が非でも、離縁したいと言つてゐらつしやるのですから、その間に挾つて、好枝も大抵の苦勞ではなかつたのです。

けれども幸ひにお正月過ぎに、お父様のお計らひで、熱田の方へ二人が別れて出ま

したから、先づよかつたと安心したのも、本の束の間でこんな事になつたのです。

この先も矢張り別居して居れば、何も問題はないんですが、こんな事があつた／＼めに、又實家へ入つて通ふといふ様な事になると、今迄よりもつ／＼難かしくなるに、決つてゐますから、到底も治らないだらうと思ひますが、俊夫さんもその位の事は、よく承知して居られますから、恐らく家へ入つて通ふといふ様な事には、ならぬだらうと思ひます。ですから今暫くの間、このまゝ様子を眺めてゐてからの事にしたら、ごうだらうと思ひますが……。」

「今色々と言ひ出しては、ごうもまづい様に思ひますから、當分の間様子を眺めて、その結果にした方が、よい様に思ひますがね……。」

「さうでせうか、そんなら一度私は、家へ歸つて、家内に相談して都合によつては、房枝を寄越す事にしませうか。」

「兄様、その方がようございます。」

姉様がゐらつしやれば、病院についてゐて、病人の世話も手傳ひ乍ら、好枝の様子も見る事が出来るのですから、是非さうして下さいませ。」



「それではそらいふ事にしやう。」

と言つて正雄は歸つて行きました。

すると一週間もたない中に、好枝の身を案じて、俊夫の病氣見舞やら、看護の手傳ひやらといふ名目で、房枝が来たのは丁度、和子が退院して行つてから、二日目の夕方でございます。房枝は道枝に案内して貰つて、病院へ行く道すがら、一年近く顔を見なかつた好枝が、長い間の苦勞に、心も體も疲れて、見るかげもない程に衰れてゐるだらうと、想像して參りました。

病室の外まで來ると、道枝は先づ

「好枝！ お母さんがゐらつしやつたよ。」

と聲をかけ乍ら、ドアを開けると、好枝は

「えゝ？ あら叔母さん、まあお母さんも……。」

と言つて、飛上る程喜んで、いそぐと出て參りました。

房枝が好枝の顔を眺めて見ると、少しも衰れてゐないばかりか、元氣のよい顔に、眼を生き／＼と輝かせてゐます。房枝はそれを見て、先づほつとして、

「まあ好枝！ お前變つた事はなかつたかえ！ 俊夫さんが大變な御病氣で、本當に心配だつたね。」

「えゝ、だけごお蔭様で、大丈夫でございますの。」

でもお母さん、よく來て下さいましたわね。」

「お父さんが歸つて、色々様子話を話して下さつたら、祖父さんや祖母さんが心配して、すぐ行けどやかましく言つて下さいましたけれども、私も折悪しく風邪を引いてゐたので、遅くなつたけれども、今朝家を出て來て、先刻叔母さんの所へ伺ふなり、こゝへ伴つて來て頂きました。」

「まあ さうですか、ほんとうによく來て下さいました。」

「お前和子様も、大變お悪かつたさうだが、それからお變りはないの？」

「はい、昨日から大分およろしいさうでございます。」

「それは結構だね、お父さんの話を聞いて、色々心配して來たけれども、こちらへ來て叔母さんから、その後の事も段々聞かせて頂いて、安心はしましたが、それでもお前がごんな顔をしてゐるかと、それを案じて來ましたけれども、思つたより元氣のよい



顔をしてゐるので、本當に私も嬉しかつたよ。」

と言ひ乍ら、俊夫の傍へ寄つて、

「大變な御大病をなさつたそうではほんとうにおわるう御座いました。」

少しお加減は如何でございますか。」

と尋ねますと、

「お母さん、よう来て下さいました。色々ご心配を掛けてすみませんでした。」

一時は自分でも、ごうなる事かと思ひましたが、お蔭様で命だけは助かりました。」

「本當に結構でございます、承りますと、和子様も大變お悪かつたさうでございますが。」

「運の悪い時には仕方のないものです。僕の病氣でいゝ位困つてゐますのに、又看護に來た妹まで、病氣になりましたので、大騒ぎをしました。」

でももうすつかり妹の方は、良いさうですから、安心してゐます。」

「もう大變およろしいさうで、何よりでございます、本當に誰方がお悪くても、いけませんでございませぬからね。」

「さうです。誰が病氣になつても、困ります。」

僕がこんな事になつたゝめに、好枝にはえらい苦勞をさせました。」

「でもそれは仕方がございませぬ、お世話を致しますのが、好枝の役で、當り前の事でございますもの。」

「所が病氣だけでなく、話にならぬつまらない事で、好枝に色々苦勞をさせましたが、でも今度の僕の病氣のお蔭で、すつかり一切の問題が解決して、みんなの心が色々な迷ひから、救はれる事が出来ましたので、却つて良かったと思つて、喜んで居ります。お母さん、色々叔母さんから、お聞き下さつたでせう。」

「いゝえ、別に何も聞いては居りませんが、皆様のお心持が揃つて、おうち中圓滿にお暮し下さる様になれば、そんな結構な事はございませぬ。」

「ほんとうにさうです。」

お蔭で僕の家も、救はれました、母や妹の長い間の迷ひも誤解も、すつかり解けて、元の通りの心に歸つて呉れましたから、僕は本當に喜んでゐます。

これも好枝が誠心誠意、盡して呉れた真心の力でありませぬから、僕は尙更嬉しくて



たまらないのです。」

「それはどういふ事か、私には薩張り分りませんが、さう言つて頂けば、何も事情は分らなくとも、私は嬉しうございます。」

「お母さん、幾日位居て下さいませす？」

「さうですね、私もごだけ居て来ると、日限を決めて参つた譯ではございませんが、貴方の看護の手傳ひを言つて、出して貰つて来ましたから、三日や五日位はごちらへでも、都合はつきます。」

「さうですか、それなら看護婦も断つて、好枝一人で淋しいだらうと思ひますから、僕が退院するまで一緒にゐて、好枝の話し相手になつてやつて下さいませんか。」

凡そ一年もお別れしてゐたので、積る話があるだらうと思ひますから。」

「遠く別れて居りますと、色々と思ひますが、會つて見るとこれといふ話もありませんが、一緒に居れば肉身の親子ですから、何時までゐても飽きませんので……。」

「姉様が病院ばかりにゐて、飽いたら又私の方へも来て遊んだり、病院へ来て泊つたりして、兩方往き来して、俊夫さんの御退院の頃まで、居てやつて下さい。」

好枝も一寸買物に出るにも、病人一人おいても出られませんから、姉様に居て頂いたら、どんなに助かるか分りません。」

と道枝が云ふと好枝も嬉しさうに

「ほんとうに私、今頃お母さんが来て下さるなんて、夢にも思つてゐませんでしたのに、そんなに長くゐて貰へたら、私こんなに嬉しいか……。」

四人は喜んで語り合ふのでした。好枝は母と叔母のために、お茶を入れて出したりして、楽しく語りつゞけて、其夜は道枝一人が家へ歸つて、房枝は病院に泊りました。好枝は幾年振りかで、懐しい母と共に、同じお蒲團の中で眠る嬉しさは、唯何に譬へようもなく、千萬無量の思ひで、唯譯もなく涙が、目頭に滲むのでございました。

房枝も恐らく、同じ思ひを胸に抱いて、楽しい安らかな夢路に入つたであらう、二人の姿を、寢臺の上から眺めて、俊夫も思はず涙ぐますにはゐられませんでした。

尤も寝たとは言つても、好枝は本當に眠るのではなくて、時々起き上つては俊夫の體に、注意する事を怠りませんでした。

母が来てからは、晝間は俊夫の看護を母に頼んでおいて、お使ひにも自由に出る事



が出来ます。洗濯をする事もお湯に行く事も、自由でございませので、好枝の喜びは一方ではありません。

暇さえあればすぐに縫ひかけの、観音像の刺繡を一心に始めます。房枝も興味を以てその傍に座つて、鮮やかに縫つて行く針の運びを見凝めてゐます。

不思議な事には、好枝は母に、

「お母さん、外の時はどれだけお話ししてもいゝんですけれども、この刺繡を始めたなら私一口も御返事は出来ませんから、話かけないで置いて下さい。」

用があつたらさう言つて下されば、仕事を片つけてから、立ちますからね。」

「話をし乍ら縫つては、何故いけないの？ 呼吸や唾がかゝると、汚くなるからいけないのかえ。」

「そうではないんですけれど、外の花や鳥や景色を縫ふのは違ひまして、観音様の御像でございませから、一針毎に心で観音經を唱へ乍ら、縫つて居りますから、外の話は出来ないのです。」

「あゝさうなのかえ、そんならよく分つたけれども、どうして又こんな病院で、そんな

な尊い観音様の御像なんかを、刺繡する氣になつたんだえ。

退院してもつと氣分が落ちてから、ゆつくり縫へばいゝのに。」

「でも人間といふものは、今ではかうして健康でゐても、明日の事も分らないんですから、思ひ立つた事はその時にやらなければ、駄目だと思つたので、叔母さんにお願ひして、布も枠も糸も調へて頂いて、縫ひ始めましたのです。」

こゝに居れば看護の傍らに致しますと、氣が散らないで落ちて出来ます。

今まではあの方が、お眠りになつた隙にばかり縫つて、これまでにしましたけれども、お母さんが来て下さつたから、拂ぎりますから、何とかして退院なさるまでには仕上げて終ひ度いと思つてゐるのです。」

「さうかい、それでは私で出来るだけの事は、私がして上げるから、お前一生懸命でお縫ひなさい。」

「さうして下さると私、これにかゝり切る事が出来ますから、有りがたいと思ひますわ、お母さん、ほんとうにこれが出来上がるまで、ゐて下さいね。」

それから好枝は、暇さえあればすぐに手を清めて、刺繡に夢中になるのでした。



夜中なごでも、房枝や俊夫が眠つてゐる間に、抜け出しては真剣で縫ひ續けて居ります。その中十日程たつと、見事な観音像の刺繡が出来上りました。

一番最後に瞳を入れる時、色々随分苦心してゐる様子でございましたが、翌朝上にかけてある覆ひを取つて、

「お母さん、お蔭様でようやく出来上りました、一寸見て下さい。」  
と言ふので、房枝が急いで行つて

「まあ立派に出来上つたね。」  
とちつと見てゐましたが、何事かにひびく驚いた様に

「好枝、一寸よく見ると、この観音様は、お顔がとてもよくお前に似てゐる様だよ。」  
「まあお母さん、冗談ばかり言つて……そんな事があるものですか。」

「冗談じゃない、本當だよ。嘘だと思ふなら、俊夫さんに一寸見て頂いて見なさい。」  
と房枝はそれを俊夫の所へ持つて行つて、

「俊夫さん、一寸見てやつて下さい。」  
好枝がこの間から、一生懸命観音様のお像を、刺繡して居りましたが、昨夜夜中に

顔を縫ひ上げると言つて、夢中で縫つて仕上げたのを、今朝見ますと、とてもよく好枝の顔に似てゐます、私の氣のせいでしょうか。貴方一寸見て下さい。」

俊夫は房枝にさう言はれると、半ば好奇心に馳られて、床の上に起上つて、  
「もう出来上つたのですか。」

と言ひ乍ら、頭を上げて見ると、五色の雲に載つた観音様の御像が、手際よく目の覺める様に縫へてゐます。その顔をよくよく眺めると、口から目つきの邊りの相が、好

枝の顔にそっくりでございますから、  
「あゝ本當に……この観音様の顔は、好枝の顔にそっくりですね。」

好枝こりや一體どうした事だい、お前顔だけ自分の寫真でも見て、縫つたのじやないか。」

「いゝえ、そんな事はありませんわなせそんな事仰有いますの、  
寫真なんか、一枚もこゝへ持つて来てはゐませんのに。」

「それにしても不思議じゃないか、こんなによく似てゐるつて事は……。」  
「ねえ、不思議でせう。好枝の顔そのまゝだと、言つてもいゝ位でございますわね。」



「さうですよ、全く不思議です、ね好枝！　どうしてこんな風に縫へたのだ？」  
「そんな事仰有つたつて、私自分ではちつとも分りませんもの。」

唯観音様のお姿やお顔に、よく似る様にとお思つて、縫つたばかりですもの、  
外の所と違つて顔はとても、難かしいんですから、目の玉の入れ方一つで、全體が  
悪くなるか、生きて見えるかといふ位に、値打に違つて参りますから、目の玉を入れ  
る時だけは、本當に夢中でお祈りして、縫ひましたけれども、そのお顔が自分に似て  
ゐるなごゝは、夢にも思つて居りませんわ。」

「それでは偶然なのか知らないが、兎に角お前の顔にそっくりだよ。」

「こんなによく似てゐるなんて、本當に不思議だね。」

「ほゝゝ、私にまさかの事があつた時に、遺品に残つていゝでせう。」

「おい、冗談にもそんなつまらない事を言ふのは止せよ。」

「本當だわね、冗談にもそんな事を言ふと、心持が悪いよ。」

「そんな事はお母さん、冗談に言つたゞけですよ。」

「それはそうに決つてゐるけど、そつういふ事は、冗談にも言ふものじゃないよ。」

その日好枝はその刺繡を枠から外すと、何處かの表具店へ早速持つて行つて、表装  
を頼んで来たのか、三日程後には、表具店から丁寧に紙に包んで、病院へ届けて参り  
ました。

好枝は喜んで、何時も信仰してゐる観音像と、一緒に並べてかけると俊夫も房枝も

「如何にもよく出来た、本當に神々しく出来たよ。」

「お前が観音様になつて、雲に載つてゐる通りじゃないか。」

「まあ、飛んでもない事を仰有います。そんな事を仰有ると勿體なうございますわ、  
叔母さんに見せてあげたら、どんなに吃驚なさるでせう。」

と言つて話してゐる所へ、幸ひに道枝がひよつこりやつて来ました。」

「まあ叔母さん、噂をすれば影がさすと言ひますが、本當にさうですわね。」

今叔母さんの事を言つてゐた所です。」

「さう、ごんな事を言つてゐたの？」

「私この間から、布や糸を頂いて縫つて居りました。観音様が出来上りましたから、  
こゝにかけて見ましたら、主人やお母さんが、この観音様のお顔が、私の顔に似てゐ



ると言つて、見えますから嘘か本當か叔母さんに見て頂かうと思つて、ゐらつしやるのを待つてゐた所です。」

「えゝ？もう出來上つたの？」

「ねえ叔母さん、この觀音様のお顔は、好枝によく似てゐますでせう。」

「ごれ、見せて下さい。あらほんにまあ、ごうしたといふんでせう。本當にこの觀音様の顔は、好枝の顔にそっくりではないの？」

「本當によく似てゐますでせう。さつきから私達がさう言ふと、好枝はそんな事はないと云つてゐますが。」

「好枝！ これ本當にお前の顔によく似てゐますよ。」

一體どうしてこんなに、よく似たんでせうね。」

「あら、叔母さんまで、そんな事仰有るの？ 本當に似てゐるんでせうか。」

「ごうしたんでせう、私何の氣もなく唯縫つたゞけですのに……。」

私……自分の寫真一枚、見た譯ではありませんのに。」

「でもよく似てるから、不思議じやないの？」

「ほんとうに不思議だ、それにね叔母さん。何だかこの觀音様のお姿全體から、絲の光以外に、別の光が出てゐる様に、私には見えるんですが、違ひますか。」

好枝！ さういふ風に見える様に、特別に工夫して縫つたのかい。」

「いゝえ、そんな事はありませんわ。」

知つてゐらつしやる通り、暇々に縫つたんですもの、そんな美術的な工夫なんか、してゐる暇はございません。」

唯私この觀音様に、眞剣な祈りを捧げて、一針毎に觀音經を誦して縫ひましたから何百遍讀んだか知れませんが、針の通つた數だけは、お經の文句が唱へ込んであります。」

道枝はそれを聞くと、大變驚いてその前へ、思はずびつたりと座つて、禮拜して暫く黙禱してから、

これは却々得難い觀音様だ。好枝！ この觀音様を、叔母さんに呉れませんか。」

「叔母さんが欲しいとお思ひになるなら、差上げてよろしうございますわ。」

「さうでは貰つてもよいのかえ。それは有りがたう。」



その代りお前には、これだけの骨折りの代、幾倍でもお禮をしますよ。

「まあお禮なんか、入りませんわ私。叔母さんの所で、大切に保存して頂けたら、そんな有りがたい事はありませんもの。」

「それは嬉しい、うちへ持つて行つて、叔父さんに見せたら、屹度吃驚して、ごんなに喜ばれるか分りません。今夜貰つて行つてもよいだらうか。」

「貴方、叔母さんがあんなに仰有いますから、上げてよろしうございますか。」

「お前がよければ、差上げてよいだらう。うちで欲しければ又、何體でも縫へるんだからね。」

「さあ、後で又縫へるか縫へないか分りませんが、兎に角叔母さんの所へ差上げておいたら、又欲しい時には、何時でもお借りして來れますからよろしいでせう。だげど折角の觀音様ですから、何處かのお寺の和尚様にお願ひして、開眼供養をして頂かなくては、折角上げて性が入つて居りませんから、開眼供養をして頂いて後から、お世話をかけたお禮に、持つて行きますわ。」

「お前がさう思ふなら、さうしてお呉れ。」

この觀音様は、開眼供養などしなくても、充分に性が入つてゐるだけけれど、まあ安心のために、性を入れて呉れてからでも、いゝんだけれど……。」

ど、それから話は外の方面に移りましたが、道枝は何だか、立つてもゐてもゐられない程の喜びを、胸に感じて、思はず知らず語り續けて、夜が更けてから、家へ歸りました。

## 退院

愈々俊夫の體も全く回復して、三月の十日には退院をする事になりました。

その事が決ると、房枝はすつかり安心して二日前の八日の朝、田舎へ歸る事になりましたので、七日になると好枝は町へ行つて、夫々土産物を買ひ調べて、荷造りをして、その晩病室へ床屋を呼んで、俊夫の散髪も美しく刈り、髭も綺麗に剃つて、醫師の許しを受けてお湯にも入つて、見違へる程綺麗になつて、病人とは思はれない様な凛々しい姿になりました。

その日房枝は道枝の所へ行つて、色々今後の事を、春光や道枝に頼んだりして、そ



れから山田家へも行つて、同様に好枝の事を、呉々も頼んで來たりしたので、病院にはあつませんでした。

夕方になると色々の用事もすましたので、房枝は宮崎夫婦と一緒に、病院へ來ましたので、好枝は町の仕出し屋から、御馳走を取り寄せて、みんなして機嫌よく夕食をすました。

それまで殆ど四十日間、誰が何と言つて勸めても、粥汁の滓と水以外には、絶対に口にしなければ好枝が、その夜は一番先に機嫌よく、箸を取つて夕食を頂きました。そしてその夜も夜更けまで、色々楽しく雑談に耽つてから、宮崎夫婦も歸つて行つて終つた後で、何時もの様に俊夫は寢臺の上に、房枝と好枝は、寢臺の脇に、伸べた同じ床の中に入つて、寢ましたけれども、どうしたものか房枝は、何となく好枝と別れて行くのが、名残り惜しい様な、悲しい遺瀨ない思ひがして、眠らうとしてもどうしても眠れません。

又好枝も、懐かしい母と枕を並べて寢むのも、今日限りかと思ふと、言ひ知れない悲しみが胸にこみ上げて來て、泳ぐ様としても、涙があとからと溢れて來て、思

はずはらくと、枕の上に落しましたので、房枝はそれに氣がつくと、

「好枝！ お前泣いてゐるじやないか、何か悲しい事があるの？」

「いゝえ、何も悲しい事なんかありませんけど、唯々お母さんが、私の事を案じて、長い間世話して下さい下さつたけれど、今夜限りで別れかと思ふと、何だか淋しい様な氣がしますの。」

「私もさつきから、何といふ事なしに、淋しい様な氣がして、仕方がないんですよ。別にこれが永い別れになるといふのではなし、遠いと言つても三十里や四十里の所で半日もかゝれば、お前がうちへも來られるし、又私達が出て來て、會ふ事も出来るのだから、何も淋しく思はなくとも、いゝ様なものだけれども……。」

「本當にさうですわねえ お母さん。」

會ひ度いと思へば、何時でも會はれますもの、遠い所ではないのですから……、うちへ歸つても、私の事は心配しないで下さい。

本當に幸福にくらさしていただきますから。」

「さうとも、別に心配する事なんかはないのだもの。」



俊夫さんはすつかり御全快なさるし、お母様や和子様は、あゝして何も彼も御親切に仰有つて下さるんだから……、今は何一つ心にかゝる事はないから、うちへ行つたら早速に、その話をしてお父さんやお祖父さんお祖母さんを、喜ばせてあげようと思ふと、一日も早く帰り度い様な氣もするんですよ。

けれどもいよいよ明日行くとなると、何だかお前と別れるのが、悲しい様な氣がして心淋しくてならないんですよ。

これは切るに切れない、親子の情愛だから仕方がないんだけど、幾ら別れ度くないと言つて、泣いて見た所が、永久にそばに居れるものではなし、何れは別れて暮らさなければならぬのだから、何處にゐたつて、健康でさえあれば結構だと思つて、喜ばなければならぬ。お前も退院したらぐつたりして、看護疲れが出ない様に、氣をつけてお呉れ。

さうしてお暇が頂けたら、一晩泊りでもよいから、來月山に花の咲頃、祖父さん祖母さんに會ひに、來てお呉れ。」

「えゝ、お願ひして見てお暇が頂けたら、山櫻の咲く頃に一度歸らせて頂きます。」

「さうしてお呉れ、そして寄越して頂ける事になつたら、先に手紙で知らせておいて呉れると、叔母さんや叔父さんにも、會ひに來て貰ふ様に知らせておくし、お友達にもさう言つて、來て頂く様に頼んでおくから。」

「はあ、又歸らせて頂ける日が分りましたら、先にお知らせ致しますが、お暇が頂けるかごうかは、一寸わかりませんわ。」

「さうだ、うちにゐる時の様に、氣儘な事は言はれないからね。」

二人が泣き乍ら、しんみりとしてこんな話をしていると、眠つてゐると思つた俊夫が突然

「お母さん、そんなに心配して下さらなくても大丈夫です、僕がすつかりよくなつたら、お禮かたぐい好枝をつれて、今月の末か來月の初め頃に、一度遊びに行きますよ。去年新客に行つて、楽しく遊ばせて頂いたのも、四月の初めで山櫻の盛りで、蔵も澤山出てゐました。」

あの時の樂しかつた事を、僕は時々一人で思ひ出します。今年もその頃、又御馳走を澤山拵へて、待つてゐて下さい。」



「まあ 貴方、お寝みになつたかと思ひましたら、私達の話を聞いてゐらつしやい  
ましたの？」

取り止めもない事を言つて泣いたりして、聞いてゐらしたらおかしかつたでせう。  
「本當に私は、よくお寝みになつたと思つて、話してゐたのですが、すつかりお聞き  
になりましたのですか。女同志の事で、つまらぬ事を話しては涙をこぼして、男の方  
から見たら、おかしい位でせうね。」

「いや、そんな事はありません、親子の情愛といふものは、本當に言ふに言はれな  
い親しいものですから、貴女達の話を黙つて聞いてゐると、何だか僕まで悲しくなつ  
て、泣けて來たんです。けれどもお母さん、もう何も心配しないで下さい。」

好枝にも、この上は苦勞はさせませんから……。」

「有りがたうございます、ごうか行届かぬ子でございますが、貴方を頼りに思つて、  
安心してゐますから、よろしくお願ひ致します。」

今の話の様に、親の口からお客に來て欲しいなどは、言ひ悪い事ですけれど、近  
所に嫁いでゐる者は、嫁に行つて二年や三年の間は、一月おき位に在所へ飛んで來る

ものですから、色々ど家の様子を聞いたり、聞かせたり出來ますが、これだけ遠く離  
れて居りますと、それも出來ませんので、私達よりも祖父さんや祖母さんが、此の子  
に會ひ度いと言つて、毎日の様に寫眞を出して、見たりして居りますから、一度寄越  
して頂けたら、どんなに喜ぶか知れません。

若し御都合がつかましたら、一晩泊りでも結構でございますから、是非一度つれて  
來てやつて下さいませ。折角來て頂いても、田舎の御馳走と言へば、うごんか椎茸か  
山の芋位で、外に珍らしいものはございせんけれど……。」

「お母さん、あの山の高い所で、御飯にお味噌をつけて、焼いて呉れたあの山の炭焼  
く人達は、今もあすこに居るんですか。」

「あゝ、あの伍平餅を焼いて呉れた、炭焼きの人達ですか。  
あの人達はまだあすこに居りますよ。」

「さうですか、今度僕が行つたら、ごつさりお土産を持つて、行つてあの小屋に一晩  
鹿の聲を聞き乍ら、休ませて貰ひ度いと思ひます。」

好枝は笑つて



「貴方、鹿は秋でなければ、鳴きませんわ。」

「あは、、、、、さうか、鹿は秋でなければ、鳴かないものかなあ。」

「春はほとゝぎすが、よく鳴きますよ。」

「あゝさうか、ほとゝぎすもいゝね、僕は鹿でもほとゝぎすでもいゝが、あゝした山の中の何とも言はれない、静かな所で、明けつ放しの窓から、鬱蒼とした木の間を通して見える、月や星の光を浴びて、一晩寝て見たいんだ。」

「そりや貴方は、初めていらしたから、そんな様にお思ひになるのですが、始終あんな所に暮すとなれば、淋しくて里が戀しくなるんですよ。」

「貴方なんかはあゝした所へ行つて、その氣持を實際に味つて見るよりも、遠い夢の國に、さうした幻を描いて、憧れてゐる方が、餘程美しくていゝですよ。」

「お母さんは、却々うまい事を仰有るじやありませんか。」

「だが全くお母さんの仰有る通り、總べて物事は、實地に當るよりも、あゝかこうかと色々なまぼろしを描いて、空想に耽つてゐる方が、遙かに仕合せですよ。」

「本當にさうですよ、花でも遠くから見ただ方が、奇麗です。」

山でも海でも遠くから見ると、繪で見た方がごんなに美しいか分りません。

自分が山へ登つて終つては、山が分らなくなるし、海の中へ入つて終つては、海の美しさが分らなくなります。」

房枝と俊夫がこんな話をしてゐる中に、好枝は美しく微笑乍ら、かすかにいびきを立て、寝入つて終ひました。

「お母さん、好枝は心持良さうに寝入つた様です、私達も眠りませうか。」

「本當に長い間、お話を致しましたね、もう寝みませう。」

それつきりで話をびつたりと止めて、お互に眼を閉ぢて、聽て深い眠りに入つて終ひました。しかし好枝は、果して安らかな幸福な夢路を辿る事が出来たでせうか。

翌朝は早く起きて、甲斐々々しく食事の支度をして、三人で食事をすまし、房枝がすつかり身支度をすました所へ、道枝が見送りのために、參りました。

そして暫くの間雑談をしてゐましたが、聽て時間が来たので、自動車で房枝と好枝は驛へ送つて參りました。房枝の切符と二人の入場券を、道枝が買つて、三人でプラットホームに出て待つてゐると、東行きの汽車が構内に入つて參りました。



好枝は道枝と共に、房枝を汽車の中まで送り込んで、手荷物などの世話をすつかりすますと、やにわに母の両手を固く握つて、

それじやお母さん、氣をつけて歸つて下さい。

お父さんやお祖父さんお祖母さんに、よろしく申上げて下さい。

そして叔父さんや叔母さん達にも、よろしくね、お母さん、そして子供達を大事にして下さいね、お母さんは體を大切に、何時までも健康で、子供のために長生きをして下さいね。」

「お前、そんな事まで心配する事はないよ、これで永い別れになるといふ譯ではないんだから……、又何時でも會へるのだからね。」

お前こそ體に氣をつけて、俊夫さんも病後の事だから、充分お世話をしてお呉れ。

又うちへ歸つたら、お父様やお母様、和子様のお心持をよく呑み込んで、御機嫌を害はない様に氣をつけて下さいよ。

又何か欲しいものでもあれば、手紙さへよこせば、出来るだけの事はして上げるから、何事も叔母さんに御相談して、一人で苦勞しない様にしてお呉れ。

さあ、汽車が出るから、もう下りて下さい、色々有りがたうございました。」

「それじや姉様、よくお氣をつけて歸つて下さい。」

兄様やお父さんお母さんによろしく申上げて下さいませ。」

「はい、さやうに申傳へます、宮崎さんにも、萬事よろしくと、お傳へ下さいませ。」

道枝は好枝を促して、汽車から外へ下りました。房枝が窓から外へ顔を出して見る

と好枝は氣のせいか、言ひ様のない淋しい顔をして、母の顔を見上げて居ります。

發車の笛が鳴つて、汽車が徐々に動き始めたので、房枝は道枝と好枝に、もう一度挨拶をすると、好枝は何と思つたか、突然大きな聲で、

「お母さん！」

と呼びかけました、房枝は

「何なの？ 好枝……」

氣をつけて暮しなさい、來月來るのを待つてゐるよ。」

と言って、思はず涙ぐみました。

涙一杯の眼で、段々遠ざかつて行く母の顔を、じつと見送つてゐた好枝は、母の顔



が見えなくなると、思はず

「叔母さん！」

と言つて、道枝に縋りついて、聲を立て、泣き出して終ひました。道枝は驚いて、

「どうしたの好枝？」

泣く事はないじやないか、お母さんが歸つて行つたつて、會ひ度いと思へば、何時だつて行けるし、又來ても貰へるのだから、……。

遠い所で海でも越えて行くのなら、又そこにもあるけれど、半日かゝれば行き來出来るもの、何も泣く事はないよ。

「さあ機嫌を直して歸るんですよ、さあ早く。」

二人は待たせてあつた自動車で、間もなく病院へ歸つて來ました。

九日の夜までには、退院の支度もすつかりと調へて終つて、好枝は看護婦達や、その他入院中に特別世話になつた人達に、すつかりお禮もすまして、心にかゝる事もなく、唯十日の朝父が迎へにさえ來て呉れば、すぐに歸れるばかりに支度を調へて終ひました。

俊夫は唯退院の出来る嬉しさに、譯もなく元氣よくなつて、野球やボートレースの應援歌を歌つて見たり、學生時代に歌つた校歌を歌つたりして、一人喜んで居ります

好枝は何となく淋しさうな顔をして、

「貴方、本當に今日はお元氣ですわね、そんなに御退院が嬉しいのですか。」

「それや嬉しいよ、こんな病院生活は、もう飽きくして終つたもの。」

お前だつて飽いて終つたぞらう。」

「いゝえ、私……ちつとも飽きませんわ。」

「おや／＼ さうかい、だがそれやさうだらうなあ、

在所のお母さんが來て下さつたので、こゝ暫くは幸福に過せたからなあ。」

「えゝ、それはお母さんが來て呉れたお蔭もありますけど、私には忘れる事の出來ない、この病院生活ですもの。」

これで別れとなれば、名残惜しうございますわ。出来る事なら、もう一日だけでもこのまゝこの病院で、貴方と二人だけで暮し度うございますわ。」

「お前は馬鹿だね、こんな病院でなくても、この先二人は一緒に暮せるじやないか、



明日は一週うちへ歸るにしても、二三日すれば又熱田へ行くのだから、さうすれば二人切りで暮せるじやないか。

お前はまだうちは今迄通りだと思つてゐるから、うちへ行く事を辛いと思ふのだから、お母さんや和子の心持は、もうすつかり變つて終つたんだから、今迄とは全然違つて、楽しい家庭になつてゐるから、決して心配しなくてもいいんだよ。」

「私、それはよく分つて居りますから、そんな事はちつとも思つてやしませんけど、唯この病院で假令一日でも多く、貴方と二人限りで暮してゐたいと、何といふ事なしにさう思つたゞけなんですわ。」

「そんな事思はなくても、いゝじやないか。本當にこんな病院などの生活より、もつとく大きい幸福が、私達を待つてゐるんだから。」

と一生懸命好枝の心を引立てる様にして、力をつけました。

しかし好枝はごうしても、何時もの様に朗かに笑ひもせず、ちつと涙ぐんで、俊夫の膝に顔を埋めたまゝ、さめぐと泣き續けました。

翌日になると昭博は、丁度いゝ時を見計らつて、自動車で迎へに來ましたので、す

ぐに病室を出て稻澤の家に歸ると、茂子も和子も門まで出て、喜んで二人を迎へました。家の中へ入ると俊夫は、唯譯もなく喜んで、嬉しさうにあらこちらを、歩き廻つて居ります。好枝は茂子の前に行つて、手をついて

「お母様、大變御心配をおかけ致しましたが、お蔭様でよくなつて頂きました、今日はお供をして歸つて參りました、本當に色々有りがたうございました。」

と挨拶して、丁寧にお辭儀をすると、

「まあお前、そんなに改つて挨拶しないでもいゝよ。」

お前には大變心配をかけたけれど、まあお蔭でこんなに早く、快くなつて呉れたので、本當に有りがたかつたよ。私も病院にゐて、もつとお世話をしやうと思つたけれど、和子が急にあんな病氣になつたので、吃驚してついて來て終つて、碌に病院へ見舞にも行かず、本當にすまなかつた。でも幸ひ在所のお母さんが來て下さつて、長い間お手傳ひ下さつたし、叔母様も何彼とお世話を下さつたから、安心して和子の方ばかりについてゐたのですよ。

病院の方の事は、お前が何も彼も細かく氣をつけて、工合よくして呉れたので、思



つた程も費用がかゝらず、早く退院が出来て本當によかつた。

お前も長い間の看護で、どんなにか疲れたでせうから、二三日は何もしなくてもよいから、ゆつくりと部屋で休んでお呉れ。」

「はい、有りがたうございます。」

「はい、有りがたうございます。早く、私……こんな勝手な事を、お母様にお願ひ申しまして真に恐れ入りますが、一寸叔母の所へやらせて頂いて、叔父にも一寸挨拶して来たいと存じますから、今からやらせて頂き度うございますが、如何でございませうか。」

「それはお前、行くのは結構だけれど、今日すぐに行かなくても、明日でも明後日でも、ゆつくりと行つて来れるのだから、今日はゆつくり御飯でも食べて、休んだ方がよいではないか。」

「本當に姉さん、あしたになさいませ、さうしましたら、私もつれて行つて頂き度いと思ひますから。」

「ほんとうに私……そんなに仰有つて頂きますのに、こんな事お願ひ致しますのは、我儘な事でございますけれど、どうしても叔母に會つて来なければならぬ用事がござ

いますので、今日行つて来たいのでございますが……。」

「そんなに言ふのなら、無理に止めはしませんけれど……、今夜歸つて来られるでせうね。」

「はい歸らせて頂くつもりでございます。」

「それじや一度俊夫やお父さんに、話して見ませうね。」

と言つて、茂子が昭博や俊夫に相談すると、二人共口を揃へて、

「叔母さんの所へ行くなら、今日でなくとも、明日ゆつくりと行けばいゝだらう。

何も今日に限つた事じやないから、今日は止めてゆつくりと休んで、明日にした方がいゝ。」

とみんなが止めるのを、何時もの好枝に似合はず、今日はどうしたのか、尙も

「叔母様に今日の中に會つて、お話をしなければならぬ事がありますから、我儘申してすみませんが、どうぞ今日これから、やらせて下さいませ。」

と言つて、聞きませんので、みんなが幾分審かしくも、腹立たしくも思ひましたが俊夫の退院で、喜びに満ちてゐる矢先でございますので、氣の悪い事は、言はない方が



いゝと思つて、機嫌よく出してやる事に致しました。

好枝は漸くほつとして、自分の部屋へ歸つて、自分の箆笥やその他の調度品を、一應丁寧調べておいて、又元の通りに錠を下して、鍵を俊夫の机の引出しに藏つておいて、紙一枚も紐一筋も亂雑になつてゐない様に、整頓致しますと、そこへ入つて来た俊夫に、

「貴方、今から一寸行つて参ります。直きに歸つて参りますけれど、丈夫におなりになつた様でも、御病氣後のお體ですから、充分お氣をつけて下さいませ。

油斷なすつて、又元へ戻る様な事があつては、駄目でございますから。」

「おい、どうしたんだ、そんな難かしい口上を述べたりして、三時間か四時間で歸つて来るのだらう、おい今夜は泊つたりなどしないで、屹度歸つておいでよ、近い所だから。」

「はい、大概は歸つて参ります、けれどもお話の都合で、事によつたら今夜だけは、泊らせて頂くか分りませんから、若し歸りません様でしたら、御心配下さいません様に、お願い致します。」

「おい、厭だぞ、泊つたりしては……。」

折角退院して来たのに、こんな二階の淋しい部屋で、一人寝るなんて淋しくてたまらないから、屹度歸つて来てお呉れ。

若し歸つて来なければ、僕迎ひに出て行くよ、それとも泊らなきやならない様な用事があるなら明日の朝早く行つたらどうだい。」

「でも貴方には、お分りにならない用事ですから……、でも大概は歸つて参ります、それではどうぞ、お願い致します。」

貴方もお體に充分お氣をつけて、ゐらして下さいませ。」

と言つて、丁寧に頭を下げて、梯子段の所まで行つてから、また思ひついた様に戻つて来て、

「貴方。」

「何だい。」

「あの、私の箆笥の鍵は、みんな貴方の机の抽出に、入れてございますから……。」

「うむ、お前の箆笥の鍵なんか、どうでもいゝじゃないか。」



どうしてそんな事言つてゐるんだ、それより早く行つて、早く歸つてお出で。」

「はい、成るべく早く歸つて参りますわ。」

と言ひ乍ら、遂ぞそんな事をした例はないのに、俊夫の両手をしつかり握つて

「貴方、若しお加減が悪かつたら、すぐにお寢みになつて下さいませ。  
お床を伸べておきましたから……。」

と言つて手を離すと、今度は後をも見ずに、階段を下りて行つて、両親や和子にも挨拶をする、お勝手へ廻つて下駄をはいて、カラコロと音をさせ乍ら、門を出て南の方へ、歩いて行く姿が見えますので、俊夫は二階の障子を開けて、

「おい。」

と呼ぶと、好枝は足を止めて、俊夫の方を見てにこやかに笑つて、軽く頭を下げる。又カラコロと下駄の音をさせ乍ら、一足々々遠ざかつて行きました。

その音を聞く俊夫は、どうした事か、胸を刻まれる様な、言ひ知れない淋しさと重苦しさを感じて、好枝の後姿が見えなくなつてからも、尙耳をすまして、その方へ向いて立つてゐますと、何といふ譯もなく熱い涙がぼろ／＼と頬を傳つて落ちました。

### 神か人か

永年の間、見馴れ切つてゐる姿容ながら、どうした事か好枝の容貌その他の總べてが、今日は不思議に思はれる程、氣高く見えて、じつと自分を見凝める瞳の、眞珠の様な輝きは、言ひ知れない崇高さを覺えて、道枝は何時もの様に無造作に、好枝に向つて冗談も云へない様な感じがして、自然に心も正し、姿をも改めなければ、ゐられない様な氣持になるのです。

それが何のためか、道枝自身には少しも分りません。勿論好枝自身にも、さうした原因になる様な事は、何も自分には感じてゐる譯ではありません。

いつもの様に打ち解けた、言ひ知れない懐しさと、心安さを以て、叔母に短い乍らも、自分が一年足らずの間に、體驗して感じた事柄を、そのまゝ打明けて、將來の女子教育の重大な参考に備へ度いといふ、眞剣な願ひから、有りつたけの眞心を以て、叔母の眞實の眞心に、訴へ説かうとする眞剣さが、自然にさうした不思議な力を、道枝の心に通はせるのかも分りません。好枝はにこやかに



「叔母さん、私が叔母さんに向つて、こんな事を申し上げるのは、全く倒な事でお釋迦様にお説法をするといふ様な、工合になるかも知りませんが、幾ら叔母さんが色々、體驗を持つてお出でになつても、世の中の總べての點についてはまだく眞實體驗な事がない事が、どれ位あるか分りませんわね。」

「それはさうですとも、世の中の人は、十人は十色百人は百色、千人は千色、萬人は萬色、皆境遇が違つてゐるのだから、その人々によつて、色々な悩みも苦しみも過ちも喜びも楽しみもあるのだから、それだけ研究したと言つても、小さな狭い範圍で、自分だけが痛切に感じた事を、過去の體驗とか、又經驗といふのですけれど、それが悉く世の中の、總べての人に當てはめて、應用が出来る、決つたものじやないんだからね。」

「さうでせう、ですから私は、總べての點からは、叔母さんに指導して頂かなければならない、人間でございますけれど、叔母さんでは味ふ事の出来なかつた、眞實の體驗を得た事があれば、其點だけでは叔母さんより私の方が先覺者とも申されませう。」

「それはさうです、本當に後から生れたつて、師弟の間柄だつて、親子の間柄だつて

世の中の事に先に目覺めて、先に進んで本當の體驗と知識を得た者は、靈的の先生に違ひないと思ひます。」

「おほ、おほ、さういふ風に仰有ると、一寸面白い事になります、本當の事は老若や、教育の多少にかゝはらず、先に本當の體驗を得たもの、話は、冗ではないと思ひます。その點から私、今日は本當に人が世に生きるための、體驗談として、叔母さんに眞面目に聞いておいて、私の體驗を叔母さんの眞心で、實際教育の上に生かして頂き度いと思ひます。どうぞ眞面目で聞いて下さいませ。」

「あ、話してお呉れよ、喜んで聞かせて貰ひますから……。」

「ま、話してお前、今日は何だか大變に、氣分が改り過ぎて、固くなつてゐる様な氣がするんだけど、ごうかしてやしないの？」

「まあ、そんなに見えますの？」

私、何も別に變つた氣持ではあませんが……。」

「それじゃ今日は、長い間の看護で疲れてゐるだらうから、さういふ話は又何時か、氣分の落着いた時に、ゆつくり聞かして貰ふ事にして、今日はゆつくりと横にでもな



つて、休んで歸つたらどうだえ。

それとも泊つて行けたら、そんな都合のいゝ事はないんだけど……。」

「私、歸ると言つて家を出ましたから、泊めては頂けませんの、だけどお話なんかは何時でも、出来る事は出来るんですが、人間といふものは、天命に依つて生きてゐる神様の子なのですから、一寸先も分らない、生死の運命を持つてゐますから、後の日を當てにして、大事な事をお話しないでおきますと、どういふ間違ひから、取返しつかない事が、出来ぬとも限りませんから、是非お話しなければならぬ大切な事だど、氣のついた事は、何をおいてもその時に、お話ししておく方がよいと思ひます。尤も人が迷惑をする様な事や、世の中に害を及ぼす様な悪いお話なら、延べられるだけ後に延した方がよいのですけど、大切な人間の道についてのお話なんかは、自分でそれを悟つたら、一刻も早い方がよいと思ひます。」

「さうかく、そんなにお前が眞剣で言ふのなら、聞かせて貰ひますよ。私自分のために今の様に言つたのじやない、お前の體の事を考へて、言つたのなんだから。」

「叔母さんのお心持は、よく分つて居りますけれども、私、今考へて居ります事を、

叔母さんに全部申上げて終はぬと、大きな重荷を脊負つてゐる様な氣がして、少しも心も體も、安らかな氣持になる事は出来ませんから……。」

「まあさうなの、何をそんなにまで、お前體驗したのか、話して下さい。」

「叔母さん、變な事を伺つてすみませんが、叔母さんは今かうして、經營してゐらつしやる學校の總べてに、満足してゐらつしやいますか？」

「満足つて言ふと？ どういふ意味で？」

「まあ分りよく申しますと、御自身の女子教育に對する、理想といふものが、悉く行へてゐて、一々満足な喜びを、感じてお出でになりますかと、お伺ひ致しますのですの？」

「さう、その事ですか、そんなら私、満足どころか、毎日不満に充ちくゝて、毎日苦しみ悶えてばかり、ゐるのですよ。」

「何故、叔母さん？ 何のためにそんなにお苦しみますのでせうか？」

「だつて考へて見てお呉れ、學校を始めない前には、それは色々な理想や計畫を立て、學校を始めたら、あゝいふ工合に見よう。」



かういふ工合にしたら思ふまゝの、理想教育が行はれるだらうと、美しい幻ばかりを描いてゐたのに、實際に始めて見ると、最初の理想とは、總べてが全く反對して、空想に近いものばかりだつたりして、努力してもくゝみんな冗になつて、自分の理想も念願も、何處にも成就してはゐないんだもの。眞面目で考へると、泣くにも泣かれない様な氣持になるのも、尤もな事じやありませんか。

「それは叔母さんとしては、さういふ風にお感じになるのは、御尤もだごお察し致します。けれども叔母さん、私はこんな事を、叔母さんに面と向つて申上げるのは、大變失禮にあたる様ですけど、私は病院にゐる中によく、叔母さんの事業の事を考へて見て、何でも言はれない様な、一種の同情と申上げていゝか、悲哀と申しませうか幻滅を痛切に感じまして、どうしても叔母さんの事業を、生命のあるものに、救つて上げなければならぬと言ふ事を、はつきりと感じました。」

「私の事業を、本當の生命あるものに救ふつて？」

「それはお前、さういふ意味の事なんだえ？」

「叔母さん 何を私が申上げてても、決して、殊更に叔母さんの事業を批判したり、反

抗したりするといふ様な、心持ではないのですから、何事も好意を以て解釋して下さつて、多少私の申上げる事が、言葉の過ぎた點がありましても、感情を悪くしたりお腹を立てたりなさらないで、最後まで聞いて下さいませ。」

「え、そりやもう喜んで聞きますよ、腹なんか決して立てやしませんよ。」

「どうぞ今迄お前は、つい一度もそんな風の話をした事もないのに、今日はさうした風の吹きまわしで、そんな話をするのか、一寸不思議だよ。」

「さうでせうけど、それは私にも分りませんのよ。」

「何となく今日は私の持つてゐる、力以上のお話か、叔母さんの眞心に聞いて戴ける様な、氣がするんですもの。」

「さう それなら尙結構ですよ、人は時によつて、非常に自分にも分らぬ程、精神の清められて、統一する時があるものです。さういふ時の行爲や、話は眞實であり、又正しく尊いものですから、本當の價値があります。」

「それで私の事業を救ふためといふのは、さういふ事を意味するのかわらや？」

「叔母さんの學校は私立ですから、官公立の學校に比べましたら、餘程自由が利いて



自分の理想といふものが、そこにある程度までは、行へる譯ではございますが、それでも一般の教育令に基いて、總べての事を行つて行かなければなりませんから、自由の中にも束縛があつて、却々思ふ様には計畫が進まれないので、それが叔母さんの、一つの大きな悩みだらうと思ひます。

それと今一つは、幾ら御自分が預つた生徒を、理想通りの思想品性人格に、つくり上げ度いと、只管心でお願ひになつても、生徒の總べてが従順に、導く方面へは進んで来ないで、一寸油断すればすぐに横道へ、逸れたがるのが常だと思ひます。

それに家庭の傳統的思想や家風もあり、又一般の社會は、殆ど現在眼に見える物質慾に心が傾いて、人間道徳といふものを無視して、學問そのものを、眞に人間として正しく、清く強く人をも我をも、幸福に生かすためにとは考へないで、物質や名譽地位を得て、贅澤したり、威張つたりするための、資料に悪用するのが、當然の様なつて參りましたから、此の頃は學問の力といふものは、全く人間の生きる幸福のためには、大きな害になつても、益にはならない様な、悲しい時勢でございます。

それで一部分ではなくて、小學校を除く外は、大部分の教育界が、さういふ傾向に

進んでゐますから、今は只形式萬能の時代でございます。

それですから、形式だけ整へて、學則や法則に當てはまつてゐさへしたら、内容はどんなものでも、平然として經營が出来て、その内面では人の子の教育といふ、教育の殿堂學校の名にも恥づる様な、いまはしい行を、公然の祕密として行つて、それを少しも恥ぢないで、教育も信仰も、世の中は一切金で動かすといふ様な、淋しい考へを持つた人達が、續々として教育界に權威を振ふといふ、悲しむべき世の中でございます。

全國の各學校を眺めて見ましても、教育の効果、精神指導の價値といふ様なものは全く度外視して、在學中から君に背き、親に背き師に背き、社會に反抗して、全く人間として取扱ふべき價値もない様な學生でも、智能さへ優れて居れば、天才だの優等生だのと賞讃して、學校が手傳つてまで、國を滅ぼす様な主義者なんかを、自ら作り上げて、國家社會に迷惑をかけても、それを學校教育の誤りとも思はず、責任を他へ被せ様といふ様な、卑怯な態度をとり、少しも恥づる所がありません。

そして内容は、どんなに見震ひする様な、俗惡陰險な學校でも、生徒數だけ多けれ



ば、有名な學校として、大方のものがそれへ雪崩込んで、自ら自己の身を滅ぼす様な渦巻きに巻き込まれて、最初は純白な魂の持主が、社會へ出る頃は、容易に清められない程の色を塗りつけられて、そのために社會に迷惑をかけ、自己もそのために、一生苦しみ、大恩ある父母をさへ、嘆きの淵に沈めて終ふ様な、悲しい結果になるのが、どれ程とも、數限りなく續出する今日では、叔母さん！ 本當に日本は、濫りに教育々々ど、一時夢中になつて騒ぎ立てましたが、この悪い教育熱が、宗教的道德の根もない、泡の様な形式的の教育畑の、開墾増殖が、遂には世界無比として、榮光ある祖國を、滅亡させる様な結果になるかも知れません。

今の世は本當は、思想國難とか經濟國難とか申しますけれど、それは皆教育方針の根本を誤つて終つた、結果なのでございますから、これは教育國難と言ふ方が、至當であると思ひます。」

好枝がさうはつきりと言ひ切つた時、道枝は妙からず驚いて、今更の様に好枝の瞳をじつと見凝めました。

「叔母さん、私こんな學者振つた、思想家みたいなお話をして、生意氣だと思ひに

なるでせうね。」

「いゝえ、それどころじやない、全くその通りだと、本當に感心して聞いてみました。そんな事をお前が、何處でどうして學んだかど、不思議に思ふ位です。」

病院にゐる間に、何かさういふ様な意見のある、大家の教育批評論でも見て、感激した事を、今お前が私に話してゐるのではないかと思ふのですよ。」

「まあ 叔母さん。」

私こんなお話をするのに、一言一句だつて、人様のお話を聞いたり、又書物で讀んだりしたのを、そのまゝ申上げてゐるといふ様な、蟲のいゝ呑氣な氣では居りません。自分の心の奥の本當の眞心の眼を開いて、社會の姿を眺めて、はつきりと見定めをつけた信念が、叔母さんに呼びかけるのでございますわ。」

「それだつたら、尙更私は一種の大きな、不思議さを感じます。」

けれども兎に角、まあ大事なお話を、途中から切つてはいけないから、最後まで續けてして下さい。」

「大體の社會の眺めました私の心眼には、今申した通りに映つて、私本當に悲しく淋



しく思つて、こんな惱ましい世に、生きて行く人々が、本當に可哀想だとさへ思ふと涙が溢れ出て、何時となく心から、總べての人の心の中に、眞實の幸福が惠まれ、物質的の迷ひから覺める事を、眞劍で祈つて上げたく思つて、よく一人で静かに世の人の幸福のために、私は叔母さん、本當に心から泣いて、祈つて参りましたが、その中に叔母さんの事を思ひ出すと、どうする事も出来ない程、お氣の毒でたまらなくなつたのです。」

「何故私の事をそんなに氣の毒だと思ふの？」

「だつて叔母さんは、心では眞實の道を只管願ひ求めてゐらつしやるのに、まだ本當の御自分の使命が悟れないで、迷つてゐらつしやるために、今私が申した様な、形式的教育の渦巻の中へ巻き込まれて、本心でない道を、不満を感じ乍ら辿つてゐらつしやるから、時々御自分でも、始末のつかない程、お疲れになるのです。」

こんな事を何時までも續けてゐらつしやつたら、定つた人生に百年も千年も生きられるお體ではなし、夢の間に年月は過ぎて、最後の日が迫つて参ります。

さうした時に、幾ら地團太踏んで口惜しがつても、何とも取返しはつきません。

叔母さんは本當に今こそ、迷ひから覺めて、心眼をお開きになつて、本當のお生れになる時に、その天地の親様がお授け下さつた、使命といふものに、お手をおつけにならなければ、いけないと思ひます。」

好枝のこの言葉は、道枝の耳には、何とも言はれない程、壯嚴に響いて、魂に強く觸れました。道枝は再び驚いて、好枝の瞳を見上げますと、好枝は相變らず、にこにこ微笑んでゐます。

「叔母さん、こんな事を私が申上げると、定めしお腹立ちになるでせう。」

「いゝえ、今のお前の一言は、お前以上のもつと偉大な人の聲に、聞えたものだから吃驚してお前の顔を見たのです。」

「さうですか、どうしたのでせう、私……。」

別に他の人の聲色を使つたわけじやございませんのに、おほゝゝゝ。」

「いゝえ、それは心の力です、お前が私を眞實の道に生かし、救ひ度いといふ眞心の響きなのです。」

眞心は天に通ずるものですから、それは矢張り天の御聲に違ひありません。



天に口なし、人を以て言はしむるといふ、昔からの諺があります、私の迷ひを覺まして下さるために、天がお前の聲を用ひて、私を教へ諭して下さるのだと、私は有りがたく思つて、喜んで聞いてゐます。

お前の今注意して呉れた事は、私の胸に一々強く應へるのです。

それでいつも本當の使命を求めて、焦り盡してゐるのですが、自分の信仰が足りないのか、疑念が弱いためか、まだく本當の使命の泉まで、見つけて漕ぎつける事が出来ないで、惱んでゐるんだから、負うた子に淺瀬を教はるの例へもある通り、お前が本當に心づいた事があつたら、教へてお呉れ。それがまことの使命だと悟る事が出来たら、私はこんな學校位、たちどころに投げ出してゞも、本當の使命の一線に立つて、懸命な力を惜しみなく、捧げて行き度いと思ふから……。」

「叔母さん。

學校をお捨てになる必要は、ないと思ひます。

唯今迄の様に時勢の潮流や、浮雲にのつた様に、據りどころのない教育をなさらないで、本當に人間が強く朗かに、幸福に生きて行かれる様に、偉大な魂を作り上げる

といふ事に、全力を注いで下さるといふのが、貴女の使命だと思ひます。」

「それならお前、これまでだつて、随分信仰的道德教育にも、自分の力のあらん限りを盡してゐるんだが……。」

「それが叔母さん、間違つてゐます。

御自分で信仰が強いとか、道德教育に命懸けになつてゐるなどいふ、意識がありましたり、又口へ出して仰有る事の出来る間は、眞の信仰でも道德でもありません叔母さんはただ、信仰的道德教育の、理想を夢みてゐらつしやるのです。

本當にさうでございますよ 叔母さん。」

道枝は三度吃驚して、好枝の顔を見つめました。

「お分 随分皮肉な、思ひ切つた事を言ふじやないか。」

「叔母さん、決して皮肉じやございませぬ。

その證據には、叔母さんが十年餘りも、この高等女學校を、經營なさいました間に、八百人に近い卒業生を、社會に送つてゐらつしやるのに、何處にその信仰や道德の花が咲いて、實がなりましたでせうか。



叔母さん、教育は理想や幻影では何にもなりません。

それが眞實に成就して、卒業生の體に魂に、立派に花が咲き實が成つて、社會に輝き、家庭を照さなければ、何の効果もございません。

この學校の卒業生も、矢張り他の學校の卒業生と同じ様に、僅かな學問に自ら傲慢になつて、親を侮つたり、お嫁に行けば姑を侮り、夫を疎んじ眞實に家の經濟も暗く、育兒教育の知識もなくて、唯自分一人學者振つてゐて、人には蔑まれ疎んせられて、自ら離縁したり、又離縁されたりする事を、少しも恥とも思はず、貞操がどれだけ大切かと、いふ事さへ知らない様な人があるため、始終忌はしい事實が起つて來るばかりか、卒業生と人に言はれても、肩身の縮まる様な不道德を、平氣で行つてゐる人もあるのは、一般の學校と少しも變つて居りません。

幾ら信仰を説き道德を説いても、教へ子に眞實に成就しない様な、主義や教訓が何になりませう。本當にそれこそ、川の流れの上に、種を蒔いた様なもので、幾ら繰返しく蒔きつけた所で、流れて行くばかりではございませんか。

それですから、叔母さんは本當に目覺めて、使命に立ち歸つて下さらなければ、い

けないと思ひます。

それには今迄の様な、實も生らぬ無駄花の芽を折つて終つて、一そ思ひ切つて惡の根や無駄な花は、悉く根本から引き抜いて、更に土を整理して、害虫を除き石を拾ひ取り、充分に土をかきならして、生かす種を育て得る力を備へておいて、その園へ選びに選び抜いた、善良な種を蒔きつけて、これに向つて一生懸命の力で、愛育なさつて下さいませと、最後にはそれが立派に成長して、よい花も咲き實も結びます。

そして一粒の種が千萬の種となり、廣い世界に充ちて參ります。

叔母さんは御自分に生活するために方便にする教育ではなくて、古今萬世を貫く人類の最大の幸福を、その魂に成就させるために、いろ／＼と御苦心して居らつしやるのではありませんか、それでしたら、今迄進んだ道は、全然間違つてゐました。

何時も叔母さんの口癖の様子に仰有います。

我が國の因襲的家族制度は、根本的に改善し、信仰と愛に満ちた、明るき家庭、喜びの家庭、崇高なる家庭に造りかへるために、燈火となるべき婦人に、眞の力不滅な力を、磨き出させるのが、叔母さんの使命だと思ひます。



これを成就させるため、叔母さんは肉體の存在を、根本的に取去つて、唯神佛様と同様の無限な愛と正義を以て、人格の力で進まなければ、文章でも物語りでも、人は決して動きません。

叔母さん、私のこの言葉で、お思ひ當りになる事はございませんか。」

道枝は重ねて驚くと、顔を上げて好枝の瞳を見つめました。何とも言へない心持になつて、又頭をがつくりと下げて、目を伏せて終ひました。

「叔母さん、御免下さい。」

私は決して、叔母さんが今迄、形式的だけで、人の大切なお子様を取扱つてゐられたのだとは、思つてゐませんのですけど、まだく有りつた力の、幾分の一も應用して見えないから、折角の御大願も、成就出来ぬのを、惜しく思つてゐるものですから、遠慮なく申し上げますの。

私が今度東京から歸りましたら、山田の方で嫁に欲しいと言つて、貰つて呉れました、けれどもこんな無知な人間ですから、叔父さんや叔母さん始め、皆様に大變な御心配をかけましたが、最初私が稻澤にゐます時は、自分は中等教育も受け、専門學校

も出てゐて、それで何も出来ないと言はれるのは、恥だと思ひました。

又嫁に行く前の日に、叔母さんから色々、嫁入つてからの後の心掛を、聞かせて頂いて參りましたから、苦し私が離縁にでもなると、自分の恥ばかりではなく、親兄弟の恥、叔父さん叔母さんの名譽に疵がつく事になるから、假令死ぬ程の苦しみを嘗めても、辛抱し抜いて見せるといふ、強い意地を持つて參りました。

それで向ふへ參りましたから、お母様や和子様、色々少しは無理だと思ふ事を仰有つても、腹の中では一々それに反抗し乍らも、表面では徹頭徹尾柔和な、朗かな嫁としての、態度を持ち續けたいと思つて、苦心致しました。

馬鹿と言はれ、白痴と言はれ、無教育と叱られます度に、心では口惜しい残念だど齒噛みし乍らも、すぐその後から親の事、叔父さん叔母さんの事を思ひますと、普通の教育を受けただけの、奥底の知れぬ女として、總べてを許して行かうと、無理にもこみ上げて来る涙を呑み込んで、笑顔を作る事につとめました。

それがために本當に私は、表面は優しい女の様に見え乍ら、心では口惜しさ悲しさ苦しき怨めしさのために、夜叉になつて居りましたので、ごんなに無理に努力して、



お母様や和子様、御機嫌を直し度いと思ひましても、向へは更に私の願ひが通じません。それも道理でございます。

私は本當の眞心からではなくて、却つて怖ろしい心を祕めて居ました。お母様や和子様の心に、清く温く觸れないのは、當然の事でございます。

それが病院でお母様が、俊夫さんの頭に手を當て、御覽になり、身も世もなく嘆き悲しまれて、今一度生命を助け度いと、願はれます親心を、眼の邊り見ました時、始めて崇高な親の慈悲といふものを、見せて頂きました。

その時私は一切を忘れて、お母様の尊い、慈悲心に満ちた菩提心に向つて、心で合掌して、このお母様に、今一度俊夫さんの生命を取り戻して、返して頂き度いと、私の本當の魂がさう強く叫んで、ふとお母様のお顔を眺めると、何となく自分を憎み、疎んじてゐる怖ろしい鬼、又蛇にも勝る程のお母さんと、思つてゐましたのが、その瞬間、阿彌陀様に似た、尊い圓滿なお顔に見え、その時に始めてお母様は、私の顔を見て、本當に心からにつこりなさつて、お眼から玉の様な涙を、はら／＼とお滾しになりました。そして、

「私は我が子可愛いと思ふ心ばかり迷つて、あなたにも色々心配させて悪かつた。堪忍してお呉れ。」

これからは本當に、お互に心を合せて、うち中仲よく幸福に暮して行かうよ。」と心の底から、仰有つて下さいました。それからはお心持が、天と地程變つて、

「好枝！ 好枝！」

と仰有つて、本當に可愛がつて下さいました。

餘りの嬉しさ勿體なさに、夢中になつて、有りがたいお母様のお心に、縋りつき度い様に思つて、私は何より幸福者だと思ひました。

そしてこのお心が俊夫さんの生命を、繋ぎ止めてゐるのだと思ひましたので、私は有りがたさの餘りに看護の隙さえあれば、叔母さんから頂いた、観音菩薩の御肖像を離しませんでした、或る晩いつもの通り、寢臺の傍につき切りで、俊夫さんの看護をして居りましたが、心地よく眠られましたので、その間にお祈りしやうと思つて、お燈明を上げて、一心に観音經を唱へて居りますと、お母様も起き上つて、伏拜んでゐらつしやいました。私は後で氣がついて、どうして拜んで下さいましたかと、お尋ね



致しますと、何となく莊嚴な清められる様な感じがして、お前の體まで尊くく見え  
たので、思はず伏拜んだのだと言つて下さいました。

それで私は思ひました。以前私に事毎に色々、お叱言を仰有つて下さつた頃のお  
母様ではなく、お母様の本當の菩提心で御覽になりましたので、同じ私の姿でも、尊  
く見えたりして頂けたのだと思ひます。

さういふ事が一番に、お母様と私を眞實の親子以上にまでも、深く眞心と眞心が結  
びついて、さうした喜びと感激の心で、身も魂も俊夫さんの看病に、打ち込んで致し  
ましたので、四十日の間食べる事も寝る事も、忘れて終つて盡させて頂きました。

自分ではそれ程に、親切に世話をしたとは思ひませんが、俊夫さんは、  
「お前の絶對の愛と眞心の力で、命を救つて貰つたのだ。」

若し看護人がお前でなかつたら、恐らく自分は助からなかつたらう。

それを思つて、一生恩に被るよ。」

と言つて、泣いて喜んで下さいました。

私はそれを思ひますと、自分でかうして上げること、上げないとか言ふ様な、義務

責任の意識や觀念で動いてゐる間は、眞實の力は満ちてゐないのだと思ひます。

私の體験から申しますと、何事でも本當の自己といふものを捨て、終へば、どれ程  
の願ひでも、必ず成就するといふ事を、はつきりと悟り得ました。

それですからこれからの教育は、自己の念願を、愛するものゝためには、一切の  
のを残りなく捨て切つて、眞實の眞心と、念願だけに歸る事が出来れば、總べての事  
は思ふまゝに、成就して行けるといふ事を、はつきりと悟りました。

それですから叔母さんにも、この先は人の言葉や教へを、簡單に取次ぐといふ心持  
でなく、自分の身によく噛みこなして見て、その魂に哺ませるつもりで研究して、優  
しく育て、頂かなければなりません。

それらの事は充分御承知ですから、今更申上げるまでもない事でございますが、私  
が見たのでも、聞いたのでもなく、本當の體験から感じた事でございますから、本當  
に失禮だといふ事は、よく承知の上で申しましたのでございますから、生意氣な事を  
言ふとお叱りにならないで下さいませ。

この事を私は、少しも早く叔母さんに、聞いて頂き度いために、随分焦りましたが



よい時がございませんでしたので、今日まで延ばして居りました。

若し多少でも御参考になれば、私本當に嬉しうございますわ。」

好枝のその言葉に、道枝は唯頭を垂れて、涙を膝の上に、ぼろりくと落して居るのみでした。

「叔母さん。こんな事申上げまして、お氣に障つたでございませうか、どうぞお許しになつて下さいませ。」

「いゝえく。さうではないの。本當にお前の言ふ事に、間違ひはありません。

お前はまだ本當に、乳臭い子供だごばかり、思つてゐましたのに、よくそれだけの事を體驗し、又深く人生の生き方も悟つて、私の迷つた魂を、導いて呉れた事を、有りがたく勿體なく思ひます。

假令お前が年は少くても、お前の今の言葉は、天地に通ずる神佛のお言葉そのまゝです。ですから、私は感謝してそのまゝ受けて、これから先の使命に備へて行きませう。

お前も本當に永い間苦んで、一時どうなるかと思ひましたのに、俊夫さんと今の所へ出して頂いて、又今度お母様達のお心が融けた以上、これからは本當に、圓滿に暮

して行ける様になつたのですから、俊夫さんの病氣は、尊い犠牲であつたと、お互に感謝すべきだと思ひます。お前も今の心持を、永久に忘れない様にして、

この先世の中に、珍らしい家庭だと賞められる程の、うるはしい家庭を造つて下さい、私が八百人の卒業生の上に、念願の實は結ばれずとも、七年間手にかけて育てたお前の體驗から、うるはしい實が結ばれたら、そんな大きい誇りはありません。

私は本當に肩身が廣いのです。」

「はい、私も出来るだけ、この先も努力しやうと、覺悟を致して居ります。」

「それにしても好枝！ 長い間田舎へも歸らなかつたから、山田さんのお父様にはこの間中から、お目にかゝつてゐるから、一度お願ひしてみやうと、内心思つてゐた所です。ですから、お前の都合がよかつたら、今度の日曜にでも一度お暇を頂ける様に、お願ひして見て上げようか。」

「さうですわね。大概はお願ひしたら、許して頂けると思ひます。」

その中に一度叔母さんから、お願ひして見て下さい。私もお願ひしておきますから。「私も今度行つた時に、お願ひするから、じゃお前も前に一度、お願ひしておきな



「はい。」

「はい、頼んでおきますわ、あ、長い間お話をしてゐる中に、もうこんなに遅くなり  
ました。叔父さんはまだお歸りになりませんか。」

「え、どうしたのか知らず。三時頃歸るつて、出てゐられたのに、早やもう直き四  
時になるんだけど……、お前今晚は泊つてお出でよ、元の通りの事情だと、こちらで  
泊めてもあとが心配だけど、今の様な有りがたい心持になつて下さつたのだから、一  
晩位泊つて行つても、そんなににお叱りはないでせうから……。」

「それでも矢張り、私……歸らせて頂きますわ。」

「うちでは屹度歸りますつて、出て來ましたのですから……。」

「さう、どうしても歸るの？ 泊つて行つて呉れるといふのにな……。」

「え、有りがたうございます。」

「でも近い所ですから、又ゆつくり遊びに來させて頂きますから。」

「私も二三日中に、全快のお祝に伺ふから、よろしく申上げておいてお呉れ。」

「はい、さう申しておきます。」

それにしても私……叔父さんに一度お目にかつて、色々御禮を申上げ度いで

すけど……、お歸りにならなければ仕方がありませんわね。」

「いゝよ。叔父さんの事は、今日でなくても、何時でもいゝんだから……。」

歸りましたら、私がよく傳へておきます。」

又その中に叔父さんにも、一度行つて貰ふ事にしますよ。」

「いゝえ、それには及びませんわ、又私が伺ひますから。」

お歸りになりましたら、どうぞよろしく、澤山お禮を申上げておいて下さいませ。」

そして叔母さんも、お體をお大切になすつて、本當に澤山の人のために、強く  
永く生きて、尊い使命を残りなく、お果しになつて下さいませ。」

「まあ、好枝！ どうしてそんな事を言ふの？ 永久の別れになるのか何かの様にそ  
んな事を言つて、氣持が悪いじゃないの？」

これから先だつて、逢ひ度ければ毎日だつて逢へるし、熱田へ行けば、又電話で一  
日に何回でも話が出来るし、始終一緒に暮す様なものじゃないの。

それにお前は今迄と違つて、幸福になれるんだしするから……。」



「本當に私、幸福になりました。これから先は、悩みも苦しみもない、清らかなうるはしい花園の様な所に、長く暮らせて頂きます。」

自分の行く先の幸福が、目の前に浮ぶについても、叔母さんも早く悩みから救はれて、是非とも幸福になり、生きる喜びを、無限に感謝して頂き度いと思ひます。」

「お前からその言葉を聞く、私は本當に嬉しいよ。」

叔父さんにその話をしたら、叔父さんもごだけお喜びになるか分りません。」

「叔母さん、どうぞ叔父さんに、好枝は救はれて、幸福になりました事を、本當に喜んで行つたと、申上げて下さいませ。」

そして叔母さん。子供達を大切にして、心も體も正しく、立派に育て上げて下さいませ、皆な一度御目にかゝりたいのだけれぞ。」

「又お前、そんな事を言ふ。大變遠い所へでも行く様に……。」

「本當に私、どうしたんでせう、又明日でもすぐ逢へますのに。」

と言ひ乍ら、大事さうに風呂敷に包んで持つて来た、軸を出して道枝の前において

「叔母さん。先日病院でお話しておきました、観音様のお像を、刺繡したそのお顔が

私に似てゐると言つて、お笑ひになりましたが、私はそんな事、少しも考へないで縫つたら、突然こんな風に出來上つたので、本當に面白いと思つてゐます。

それが幾分でも私の顔に似てゐましたら、人間は老少不定といふ事がありますから私の身に若萬一の事がありましたら、叔母さんに對してよい遺品になると思ひます。」

「好枝！ お前本當に、今日はどうしてゐるの？」

老少不定だとか、遺品だとか言つて、本當に私氣持が悪いよ。」

「おほほ、、、。そんな事ございせんわ。さう言つたら叔母さんが、ごんな顔をなさるかと思つて、申上げて見たゞけでございませぬ。」

又二三日中に伺ひます、俊夫さんも、是非伺ひ度いと言つてゐましたから。」

さう言つて何氣なく立上ると、座敷の神棚に恭しく禮拜して、又御佛壇にも丁寧な禮拜して、暇乞ひをされると、座敷を立ち出でましたが、これは好枝の以前の習慣ですから、別に變にも思ひませんでした。が、玄關を出る時に、好枝は眼に一杯涙を堪えて、

「叔母さん。莎父さんがお歸りになりましたら、よろしく申上げて下さいませ。」



叔母さんもお體を大切になさつて、御丈夫でお働き下さいませ。」

と言つて、口元では微笑みましたが、思はずはらくこたゝきの上に、大粒の涙を落しました。道枝は何となく、言ひ様のない、別れ度くない氣がしたので、

「好枝！ 何だか今日はお前を歸し度くない。山田さんの方へは使を出すから、泊つて行つてお呉れ。お願ひだから、叔父さんもその中に、歸つて來ますからね。」

「でも今日は、どうしても泊めて頂けないのです。」

二三日中に又伺ひますわ。叔母さん。私涙なんか滾して、本當に變にお思ひになるでせうが、何でもありませんの。

唯今迄の事を色々考へて、胸に詰つて泣いて終つたのですわ。

決して悲しい涙ではないんですから、安心して下さいませ。

光男さんも正敏さんにも宜しくね、治子さんもお父様やお母様を大切に、一生懸命勉強して、偉い人になつて下さらなくちや、駄目ですよねえ。

ではさようなら。」

女中の君に送られて、門を出ましたが、道枝は何となく心を引かれて歸し度なく

思はれたので、後から走り出て見送りました。

好枝は名残惜しうに、三度も後を振り返つては、お辭儀を致しましたが、一丁程向ふの角を曲ると、どうく見えなくなつて終ひました。道枝は何だか、胸一杯に迫つた様な氣がして、自分の部屋へ歸ると、ばんやりと考へ込んで終ひました。

## 永別

その翌朝八時頃に、山田家から女中のたみが尋ねて來て、挨拶もそこ〜に

「あの奥様は昨晚お泊り遊したのでございませうか。」

と尋ねますので、道枝は怪訝な顔をして、

「奥様と仰有ると、好枝の事でございませうか。」

「はい若奥様の事でございます。」

「好枝は昨日、私の所へ参りまして、夕方になるまで色々、話して居りましたので今晚は泊つて行く様にご申しましたら、歸つて参りますと言つて、家を出して頂きましたから、御心配かけるといけないからと言つて、夕方歸つて行きましたが、お宅へ



は歸りませんでしたでせうか。」

「はい、昨晚お歸りになりませんので、皆様が随分御心配なさいまして、今朝は早く行つて、伺つて来いと仰有いましたのでお伺ひ致しましたのでございますが……。では奥様は昨晚歸ると仰有つて、お出掛けになりましたのでございますね。」

「こちらは四時過ぎに、遅くなるといけないと申しまして、出ましたのでございますが、それではお宅へは歸りませんか。そんならどうしたのでございませう。」

「御宅様はうちへかへると仰有つて御出掛けになりましたので御座いますか。」

「それでは本當に、どう遊しましたのでございませうか。」

道枝は顔を眞蒼にして、

「貴方、好枝が昨日おうちへ歸つて行かなかつたさうですが、一體どうしたのでございませうねえ。」

「何？　うちへ歸つて行かない？」

それは一體どういふ譯だ。あれに限つて、無斷で他所に泊る様な大膽な事は出来る性質じゃないんだが、何處へ行つたんだらうか。」

「若しかすると、何か相談でもしたい事があつて、あのまゝ在所へでも行つたのではないでせうか。」

「さあ、それも分らないなあ。」

だが前の頃なら、そんな事もないとも限らないが、今ではお母さんや妹さんの心も直つて、俊夫さんの病氣も全快して、あれの身になつて見れば、全く幸福の絶頂とも言ふべき時だから、無斷で在所へなご行かないでも、行き度いと思へば、何時でもやつて貰へるのだから、そんな無法な事をする筈はないと思ふのだが、事實山田さんの方へ歸らないとすれば、或はさうかも知れないよ。」

「さうですよ、他所へ行く様な心當りなんか、少しもありませんものね。」

「兎に角困つた事になつたなあ、すぐに在所へ、電報を打つて、問ひ合せて見たらどうだ。」

「聞いて見ませうか。」

「あゝ、それが先づ第一番だね。」

そんな事をして呉れては、山田さんの方へ本當に申譯ないんだけれど、それでも在



所へ行つてさへ居れば、安心が出来るんだから、兎に角電報で聞き合せて見よう。」  
と言つて、直ぐに

「ヨシエカヘツタカスグシラセ」

と至急電報を打つと、二時間程して

「ヨシエカヘツテヲラヌクワシクシラセ」

といふ、返電が参りました。

二人は一層蒼くなつて、

「矢張り行つてはゐないのか。」

「一體どうしたのでございませう。」

おたみも心配さうに、

「矢張り奥様は、お在所へもお越しになつてゐらつしやらないのでございませうか。」

「はあ、行つてゐないといふ返事です。本當に何處へ何つたのでせう。」

「どう遊したのでございませう。」

「外にみよりはないのでですから、少しも見當がつかないのでございませうよ。」

貴方、本當にどう致しませう。」

「どうと言つた所で仕方がない。先づ何れにしても、有りのまゝを、すぐに山田さんへ申上げて、相談の上で行方を探さなければならぬ。」

おたみさん。貴女はすぐに歸つて、この事をすつかりお話しして下さい。

私も後からすぐお伺ひ致しますが……。」

「それでは私、失禮して歸らして頂きまして、その様に申上げる事に致します。」

「どうぞお願ひ致します。」

おたみは慌てゝ歸つて行きました。

それから一時間もたない中に、第一便が配達されました。

道枝は幾通かの手紙を受取つて、何氣なく見てゐましたが、

「あらッ？ 貴方、好枝からの手紙がございますよ。」

「好枝から手紙が来た？ どれ見せて御覧。」

二人は手早く封を切つて見ますと、五枚の便箋にペンで、次の様に認めてございませう。



叔母様

本日は突然お伺ひ致しまして、色々ご御厄介をかけまして有りがたうございました。また自分の身分も忘れて、叔母様に對して、色々ご理窟がましい事の數々を申し上げます、本當に失禮を致しました。

禮儀も知らぬ私をどうぞお許し下さいませ。

それにつきまして本日、叔母様にごくご御相談して、御了解を頂き度いごも思ひましたが、何んごなく氣怯れがして、遂に御相談もしないで、本意なくも失禮させて頂きました。實は私この度、俊夫さんの御大病にて入院中、全國の神社佛閣に心願をかけまして、俊夫さんの御生命をお救ひ下さいませ。なら、全快の曉は、退院の即日うちを出て、お禮詣りに廻りますと、御願がしてございましたが、幸ひにも神佛様の御守護に依り、一時危篤にまで陥つた病氣も全く快くなりました。今日退院させて頂きました。

人間同志の約束なれば、言葉の言ひ譯も亦、申し述べも出来ませぬけれども、お姿容もお現はしにならない、正義と誠にあらせられます神佛様への御誓

約をそのまゝ捨て、おく事は、自分の心が許しませんので、是非ごもお禮詣りに出掛けたいと思ひます。

けれどもまだ嫁の身の上としては、表向き公然とそんなお願ひは、致し兼ねますし、又致しましてもお許しが頂けないのは、分り切つて居ります。

それでございますから、申譯ない事とは存じますが、自分一人である覺悟を決めまして、無斷でうちを出しました。

その序に他所ながら叔父様叔母様にも、今迄の海山の御高恩を受けたお禮を申上げ、叔母様だけになりごも、自分の心持を申上げて、御内々に御同意を頂いておき度いと思ひましたが、それもつい氣怯れがしてよう致しませぬ、お別れ致しました。今から私は御祈願をかけました、神社佛閣を參拜するため、旅に出かけますが、どうぞ私の事は、神佛様が始終お守り下さいませ。から、少しも御心配ありませんから、御安心の上お待ち下さいませ。

明日から凡そ二十一日目には、必ず歸つて参ります。

それまでは假令山田家、及び在所からごの様にお話がありましたも、私の心



願成就のために、そのまゝお捨ておき下さいませ。願ひ致します。  
若し私の採りましたこの行動が禍となりまして、叔父様や叔母様に御迷惑をおかけする様な事がありましたら、私の一命を以てども、叔父様叔母様のお立場は明らかに致します。  
實は叔父様にもお目にかゝり、篤とお禮申上げて、お別れしたかつたのでございませが、お留守のために、残念乍らお目にかゝる事が出来ませんでした。叔母様から、呉々もよろしくおつたへ下さいませ。大變先を急いで居りますため、お名残り惜しうございますが、今日はこれで筆を止めます。尙この先も道中の事とて、通信なご申上げないつもりでございませから、旅先から何のおとづれもございませんでも、恙なく巡拜してゐるものとお察し下さいまして、參拜が終つて無事に歸る日を、お待ち下さいませ。願ひ致します。  
光夫さん正敏さん、治子さんを大切に、皆様へもよろしくおつたへ下さいませ。蔭乍ら叔父様叔母様の御健康と、御幸福をお祈り致します。

好枝より

おなつかしき

叔父上様

叔母上様

道枝ほ一息は読み終ると、

「まああの子は、ごうしたといふのでせう。一人でお願ほごきに行くなんて……。」

「おかしい事を言ふじやないか。一人で勝手に決めて出て行つたりして……。一應相談して出て行くなら出て行けばいゝのに。」

「さうですよ。そんな事なら、何もあれ一人で行かなくても、私がついて行つてもいゝし、又在所の嫂さんか、お祖母さんでも、喜んで一緒に行くのに、若い女の身で一人旅に出るなんて、幾ら交通の開けた今日だつて、矢張り危険です。」

第一それでは山田さんの方へも、言ひ譯が立たない事になるし、困つた事になりましてね。」

「あんなおとなしい性質の好枝が、ごうしてそんな氣になつたらう。」



「そんなに旅費がないだらうが……。」

「さ、でございますわ。」

旅費もそんな永い間、旅をする程はない筈でございます。

病院で餘程小遣ひも使つた後ですもの。

それならその様に話をすれば、お金だつてやるのですし、どうしても行かなければならないのなら、どんな具合にでも話をしてやるのに、そんな事を一口も言はず、唯大真面目になつて、教育の問題なんかを、私に説いて聞かせてみましたので、私も好枝が餘り真面目で、眞理を穿つた事を話すものですから、何時の間に好枝はこんなに賢くなつたんだらうと、感心して聞いてゐた位でした。それでそんな心持であるとは夢にも氣がつきませんでした。どうしたらよろしいでせう。」

「このまゝ捨て、はおけないから、兎に角こちらへ行つたのか、それをつき止めて、後からでも誰か追つかけて行つて、御參拜をすまされば、歸らないと言ひ張れば、一緒にお詣りして廻らねばならぬが、西へ行つたか東へ行つたか、それが分らなければ手掛りもないしね。」

「本當に思ひもよらない事をし出来して呉れましたね。」

と話し合つてゐる所へ、俊夫が慌しく自動車で、駆けつけて參りました。

それこそ顔色も眞蒼にして、息もせはしく挨拶もそこ〜にしてから、

「好枝が昨日お伺ひしてから、家へ歸りませんので、皆して心配して今朝たみを伺はせましたか、

たみが歸りましたで、こちらには好枝は泊めて頂いてゐないし、在所へも問合せて頂いても、來てゐないといふ返事だつたと言ひますので、両親も非常に心配致しまして兎に角こちらへ伺つて、よく叔父さんや叔母さんに御相談して、前後策を講じやうと言つてゐた所へ、好枝から手紙が參りましたので、早速開けて見ますと、僕の病氣全快の禮參りのため、諸國の神社佛閣へ參拜に行くと言ひ書いてありますので、僕には半信半疑ですから、すぐにこの手紙を持つて伺ひました。

一應御覽下さい。」

ご懐から好枝の手紙を出しますので、道枝は、

「實は宅へもつい今方、好枝からこんな手紙が參りましたので、二人で見てもうしや



うかと言つて、相談してゐた處ですの。」

と言ひ乍ら、俊夫の手に代りの手紙を渡しました。

「さうですか、では一寸拜見します。」

と俊夫はその手紙を半ば奪ふ様に受取つて、微かに手を戦かせ乍ら、手紙を開いて眺めてゐます。道枝が俊夫から受取つた手紙を開いて見ますと、

俊夫様。

今日は、目出度く御退院が出来て、久し振りで御両親様のお膝元へお歸りになりました、このお喜びの日に、私こんな我儘をさして頂きます罪を、何卒お許し下さいませ。

かやうに申ししましても、お許し願へないで、無法な行動をとりました私の罪を、お咎め下さいませと存じますと、切ない感じが胸に迫ります。

けれども私と致しましては、かうした道と方法を選ぶより外には、自分の願ひを貫く事が出来なかつた立場をお察し下さいまして、何事も御寛大な思召で、お許し下さいませ事を、幾重にもお願い申し上げます。

實は私貴夫様が御大病にて、御入院の當時餘りにも御重態で、一時は危篤に陥り遊したゝめ、お医者様からは、御生命の程もお請合ひ出来兼ねるこのお言葉がありました程の有様で、御両親様のお嘆きは、お話にもなりません。そのお心持をお察し申し上げ又、貴夫様の御苦痛の様を思ひますと、私も生きた心地もなく、一時は身も心も空虚の様になりましたが、斯様な場合心が弱くてはいけない、人間の力で及ばなければ、全知全能大悲大愛の神佛様にお縋り申してゞも、今一度もこのお體に御恢復の御守護を願はうと、日本全國の靈かな神佛様に、無理なお願をかけました。

若し私のお願ひをお聞き入れ下さいまして、貴夫の御病氣を全快させて頂けますなら、御退院の即日にお禮参りを致しますと、繰返し願ひ續けた一念が、神佛様に通じたものか、あれ程危険に陥られた御病氣も、一刻々々ご御恢方に向はせられ、今は全く御全快、御退院といふ、嬉しい日を迎へる事が出来ました。

貴方のお健やかなお姿、又御両親様のお喜び下さるお顔を見るにつけても、



これ偏に神佛様の御守護の賜と思ひますれば、じつとしては居られませんが、御退院後の御養生も、尙大切にございませうから、今當分お傍にゐて、何彼とお世話申上げ度のは山々でございませうが、神佛様のお約束を忘れませう事は、後世の天罰を怖れますため、お約束致しました通り、今日直ちに出發致し度いと思ひますが、そんな事をお願ひしても、御兩親様や貴夫様が、お許し下さる事は、おそろくあるまいと存じますので、餘りにも申譯ない事は山々存じ乍ら、思ひ立つた心の一念止みがたく、後の日にお咎めを受ける事も覺悟の上で、今日このまゝ旅立たせて頂きます。

宮崎の家へも立寄りまして、他所乍ら叔母に暇乞ひして参りました。昔とは變りまして、交通の便開けました今日故、早く参拜も終りまして、私の心づもりでは二十一日間位の中にすまして歸らせて頂く事が出来るかと存じますから、何卒それまでは私のお願ひに免じて、このまゝお許おき下さいませう。貴夫様から御兩親様へも、よろしくお取り做しの程お願ひ致します。何れ立ち歸りました曉には、私からよく御兩親様へお詫びを申上げる考へでございませう。

尙僅かの間のお別れでございませうから、改めてかゝる事を申上げる必要もございませうが、人間は老少不定でございまして、今日あつても明日の命も計り難きが、浮世の習ひでございませうから、萬一私の身に變つた事がございまして、このまゝお別れになる様な事がございまして、これまでの因縁であつた事をお諦らめ下さいまして、貴方様は愈々御幸福に、お暮し下さいまして、御兩親様にも専心御孝養をお盡し下さいませう様只管お願ひ申上げます。尙又道中恙なく、巡拜を終つて歸らせて頂きましたら、共に御孝養をお盡し申上げて、海山の御高恩に報ひ、將來の御心身を彌が上にも、お慰さめ申上げ度いと希つて居ります。

幸夫様にも和子様にも、何卒よろしくお傳へ下さいませ。貴方様も御病後の御養生を専一に遊ばしまして、一日も早くもこの御健康状態におかへり下さいます事を、心からお祈り致します。

道中からは書面は差上げませんから、音信はななくとも御心配下さいませぬ様



に、併せてお願い申し上げます。

好枝

俊夫様

道枝はその手紙を、幾度か涙で曇つて見えなくなると、袖で目を押へては、漸く最後まで読み終りました。

何とも言い様のない、遣瀨ない悲い思ひがして、止め度もなく涙が溢れて來ます。俊夫が病院に入院した當時の模様を、眼の邊りに思ひ浮べ、四十日程の病院生活の間の好枝の態度を思ふにつけても、この手紙にはその當時の心持の、五分の一も書き表はす事は出来ぬであつたゞらう。

それがために苦しまぎれに唯一筋に、神佛様に縋りついて、救ひを求めて涙び泣いた姿を思ひ、その腫に浮ぶ涙を思ふと、これ位の願はかけそうなものだ。かけたからには好枝の性質として、神佛様を偽る事は出来ないため、何も彼も覺悟をして家を抜け出したのであらう。

思へば昨日自分に向つて、何時もとは全く違つた態度で、眞心から教育上の問題と

私の眞使命について、憶面もなく水が流れる様に解いてゐた。

平常の好枝とは、全く別人の様に見えたあの姿、あの聲も矢張り神佛の守護を受けてゐる好枝であるがために、これまでの因縁によつて、好枝の體を通して神佛様が、愚かな私のために、人生の眞の道を教へて下さつたのではあるまいか。

それにしても好枝は、無事で歸つて來て呉れるだらうか。

若しや道中で色々の事が、ありはしないだらうか。

若しそんな事になつたら、國元の両親や祖父父母の嘆き、又現在蒼ざめて終つてゐる俊夫やその両親の嘆きは、如何だらうかと思ふと、その有様が幻の様に表れて、どうしてもちつととしてはゐられない氣持になつて、

「この手紙にも、矢張り同じ様な事が書いてありますから、お參りに行つた事に間違ひはないでせう。幾ら好枝がかう言つても、このまゝではおかれないうでせうね。」

「勿論このまゝ捨てゝはおけないよ、ごんな事になるかも知れないからね。」

「どうしたらいいでせうか 山田さん。」

「さうです、まあ警察へお願いして、全國の主な神社佛閣へ、手を廻はして頂いて、



見つかった所で引き止めて貰つて、こちらから行つてつれて歸るより外に、致し方はありませんでせう。

でもこれだけの決心をして出た以上、つれて歸らうとしても、一寸歸りますまいから、さうしたら一緒にいて、巡拜して歸るより外に、道はありませんね。」

「さうです。」

それより外に、仕方がありませんまい、それでは早速その手続きを致しませうか。」

「それじや、ちつとも早い方がよろしうございませう。」

三人はそう言つて、色々協議をした上で、すぐに野田家へも電報を打つて知らせ、山田家の両親とも相談の上で、その夕方警察へ願つて、手配いたしました。

その翌日になると、好枝の父の正雄も駆けつけて参りましたが、矢張り里へも同様に今迄の海山の御恩を、繰返しく感謝して、このたびの大願のために、巡拜したいために、無断で家を出た事を知らせて、同じ様に二十一日目には、歸ると書いた手紙が行つたと言つて、みんなに出して見せました。今迄の喜びに引きかへて、暗雲に閉ざされた様な不安な一日は過ぎて、翌日になりました。何の音づれもありません。

かうして明日はくど、心待ちにたよりを待つ、遣瀬ない日が五日十日と暮れました。しかし好枝からは、何れへも風の便りもありません。

施すべき手段も方法も成盡した今では、ごうする術もありませんので、徒らに手を組んで、様子を眺めるばかりでございました。

その中好枝が家出してから、十日も過ぎてからは、皆の心にもう後十日内外で、歸つて来るのだと思ふと、幾分心に明るみが射して、

「今日まで何處からも、何の便りもない位だから、無事で参拜して廻つてゐるだらう間違ひがあれば、土地の警察から知らして来るに違ひないから、この上は無事で巡拜して歸る様に、一生懸命でこちらでも信心して、待つがよからう。」

とみんなで相談して、正雄は一時郷里へ歸つて行きました。

俊夫も今は致し方なく、朝夕心秘かに、好枝の無事に歸る日を、神佛に念じて待つてゐましたが、山田家の両親や和子も、立場は違つても同じ思ひで、好枝の無事を祈りつゞけました。道枝は好枝が家出して以來、鹽物断ちをして、朝夕一心に、神様に好枝の無事を祈り續けました。



祈らずにはゐられない、遣瀨ない思ひが、始終ひしくと身に迫つて参ります。  
道枝は唯好枝が諸國の神社佛閣を無事に巡拜し終つて、歸つて来る事をのみ心に祈るといふ様な小さな問題でなく、好枝の今度の家出といふ事が、どうしても自分と深い關係がある様な心持がして、何となく自分の生活の上に大きな變化が起つて来る様な感じが致します。それは何と言つて形で説明の出来ない心の衝動でございました。  
いみちき因縁によつて、無限の愛と慈悲を以て、親子と生れた里の両親も、二世も三世までもと誓つた仲の俊夫にしても、心からなる愛は強いけれども、それがために一念を以て、神佛に念じるといふ眞剣さには乏しく、唯遣瀨ない思ひに、心が亂れるばかりでありました。

かくて日は過ぎて、明日は好枝が書き残して行つた通り、歸るといふ二十一日目に當るといふので、在所からは正雄も房枝も、わざと出かけて来て、山田家と、繁々と往來して、明日好枝が無事で歸つて来たら、祝つて迎へるためにと、恭しく神佛の祈りもする様に、その手配まできちんとして、山田家の方では好枝が歸つたら、叱言など一言も言はず、却つて感謝して迎へる様にと言ひ合せて、みんながうるはしく

温い眞心を以て、好枝の旅に疲れて歸るのを、待ち焦れて居りました。

### 夢の妙法寺

好枝がゐなくなつてから、丁度二十一日目の夜、明日は大方好枝が、無事に参拜を終つて、歸つて来るであらうといふので、別に好枝から知らせはなかつたけれども、好枝が山田家や、宮崎の家や里へ宛て、残して行つた手紙の文面の通り、何の知らせはなくとも、二十一日目には歸るだらうといふ想像から、何となく希望と喜びに満ちた心持で、みんな夫々好枝の無事で歸つた顔を見るのを、一日千秋の思ひで待つて床に就きました。道枝も好枝が残して行つた、救世觀音菩薩の御肖像に向つて、御燈明を捧げ香を炷いて、好枝の無事を祈つてから、床に就きました。  
そして長い間の心配と氣疲れから、何時寢入つたともなく、安らかな眠りに落ちました。

X  
X  
X  
X  
X  
X  
X  
X  
X  
X



道枝は今迄一度も見た事もない、清らかな谷川に添つて、緑深い深山路を獨りで、歩み登つてゐるのでした。

行けども山又山、谷又谷で人の住家など、どこにも見當りません。

空は雲に霞んで、山は緑に包まれて春の色を、深く立て籠めてゐます。

道枝は歩み疲れて谷の底の、小川の邊りの木の根に腰を下して、休んでゐると、何處から來たとも分らない、十歳位の可愛らしい稚兒が、ひよつこり道枝の目の前に現れて、道枝の顔の人懐し氣に見上げて、

「小母さんは、何處へ行くの？」

と尋ねます、道枝は驚いた様に、その稚兒を見て、

「まあ貴方は、どこから來たのですか、この邊りに家なんかちつともないのに。」

「私、この山の上の、お寺から來たのです。」

「お寺ですつて？ この山の上にお寺がありますか。」

「小母さんは知らないのですか、この山の奥には、妙法寺と言つて、とても尊いお寺があります。私はそのお寺にゐる稚兒なのよ、禪師様が小母さんを、お迎へに行つて

來いと仰有つたので、此處までお迎へに來ました。」

「え、？ 禪師様が私を迎へに行つて來いと仰有つたのですつて？」

その禪師様はどういふお方ですの？」

「小母さんをよく知つてゐらつしやる、それはく尊い、お優しいお方でございます。お出でになればすぐに分ります。」

お荷物持が持つて上げませう、もうすぐに近くですから、すぐにゐらして下さい。

「さあ參りませう。」

と言はれて、道枝は夢に夢見る心地で、審しく思ひ乍ら、稚兒の導くまゝに、凡そ路の十町も登つて參りますと、背後に折重つた様な岩石を負つた繪にも書けない様な美しいお寺へ參りました。

稚兒に導かれる儘に、本堂へ入りますと、お燈明がゆらり／＼と點つて、えも言はれぬ香の匂ひがして、金銀の嬰瑤で眼醒める様な御本堂の中に、佛様が輝いて見えます、その前に氣高い老僧が、端座してお經を上げてゐます。

道枝はこの莊嚴な佛前に向つて、氣高い老僧の後に座つて、合掌禮拜して居ります



と、老僧が清らかな、玉の様な聲で讀まれるお經の聲が、深く／＼自分の眞心に觸れて、何とも言はれない、尊さど又喜びを感じて、涙ぐんで一心に、合掌して居りますと、聽てお誦し經を終つた老僧は座を立つて、座をかえて道枝の方に向つて座り直すど、いとも嚴かな聲で、

「遠い所をよくこそお詣りなされた。

今日貴女を迎へに出したのは、外ではない、貴女の身内の若い娘が、修業を終つて今日歸られるので、お迎へに来て貰つたのじや。」

道枝はさう言はれると、はつとして、

「はい、さう仰有つて頂きますと、私の姪の好枝と申しますものは、こちら様で御厄介になつて居りましたのでございますか。」

「さうじや、丁度今日から二十一日前の夕方、こゝへ尋ねて來られて、心願の筋があつて、この寺に籠つて修業すると言はれ、その日からじつと今日まで、夜晝不眠不休で、斷食の行を續けられて、今日はその満願日でありますのじや。それで本人も大分疲れて居られる様じやから、よく世話をして、二三日もこゝで力

をつけて、歸つて下さるとよからうと思ふのじやが……。」

「まあ 左様でございますか。」

そんな事は一向存じませんので、おの子が家を出ます時、諸國の神社佛閣へ心願かけたから、お禮參りをして來ると言つて、書面を出しましただけで、無斷で家を出ましたので、ごんな所を參拜して廻つてゐるのかと、色々想像してゐましたが、では何處へもお詣りに巡らず、初めから御當寺に來て、修行させて頂くつもりだつたものと存じます。」

「左様じや、初めからこの寺へ來られたのじや。」

「こゝは昔から、色々の方がよく修行に來られて、念願を成就される所で、却々諸佛の御守護の靈かな、尊い御山じやからな。」

「左様でございますか、一向に存じませんが、眞に失禮を致しました。」

あの眞に不躰な事を、お伺ひ致しまして恐れ入りますが、このお寺は何縣の何處なのでございませうか。」

「あはゝゝゝ。お分りにならんか?。」



いやお分りにならぬのが本當じや、此處は日本の國の何縣でも何郡でもない、全く地界とは離れた、別天地の妙法寺といふ寺じや。」

「まあ さやうでございますか。」

と道枝は如何にも俯に落ちない様な顔で、老僧の顔を見上げると、

「不思議に思はれるかな、貴女は夢といふものを見た事がありますか。」

「はい ございます。」

「それでは夢に夢見た事はあるかな。」

「はい そんな事も、一二回ございました。」

「それじやよ、貴女の今來てゐるこの妙法寺も夢なら、貴女の常に住んでゐる社會も夢の娑婆だ。」

一朝魂が肉體から去れば、夢の世界としてより、過去の姿を振り返つて見る事も掴む事も出来ない。此處が夢なのか、又は娑婆が夢なのか、どちらとも分らない。

その夢の娑婆に、僅かの間生きるものが、色々の慾の迷ひから、つまらぬ事に争つたり、憎み合ひ奪ひ合ひ、殺し合ひ、泣いたり悩んだり、苦んだりしてゐるのは

本當に愚かしく又、馬鹿らしい事じやよ。

お互に愛し合ひ助け合つて、楽しく幸福に暮して行けばいゝのに、何時までも迷ひから醒めない人達にも、困つたものじやよ。

わしもそれが厭さに、斯ういふ山の中に引込んでゐるんじやが、色々な人はそれがために苦勞もする。神佛もこの迷ひから救ふために、常に様々な御苦勞をなさるのだが、その有り難いお心さへ信するものが少なくなつて、勝手な事を行つてゐるのじや。

世の中は段々と騒がしくなつて、複雑して一層住み悪くなつて行くばかりじや。實に困つたものじやが、このまゝ捨て、おけば、娑婆は全く悪魔の世界の様に、荒れすさんで終ふだらう。

貴女はそんな事を、眞面目で考へた事はないかな。」

「はい、仰せの通り色々に考へては居りますが、何分にも力が足りませんので、どうする事も出来ません。自分の弱さを悲しみ乍ら、まだこの年になりましたも、生き甲斐のない生活を續けてゐます。」

「じやが感じた者が、正しき道を開かなかつたなら、悟り得ぬ者や、迷つた者ではど



うする事も出来ない。

自から正しいと固く信ずる事を、ごし／＼娑婆世界の規則にも教育にも習慣にも行つて、正義を押し廣めて行くといふ事が、眞の人間の義務じやないか。

それを何時までも、悟り得ぬ者又悟つても、實際に行ひ得ぬ者は、愚者なのじや。」

「はい 御尤もでございます。」

「あは、／＼、／＼。私はさう思ふ事を言つただけで、貴女を指して言つた譯じやない。」  
老僧はさう言つて、何氣なく高らかに笑つたが、道枝はこの老僧の一言一句が、眞心に強く貫かれる様な感じが致しました。

體が戦いて、熱い涙がポタリ／＼と、疊の上に落ちました。

「扱それでは姪御の行者に、お逢はせしやうか。」

道枝は始めて我に復つて

「はいごうぞお逢はせになつて下さいませ。」

「如何にも合はせて進せよう、だが貴女に注意しておくが、行者は絶対に無言じやから、御座を立つて、衣服を改めるまでは、絶対に言葉をかけてはならぬ。」

絶対無言じやから、呉々もそれをよく心得ておきなされ。」

「はい 承知致しました。」

「今一つ貴女によく言つておく事は、行者が座石から立つた時に、どんな不思議な現象が現れても、絶対に驚く事はないのじや。」

行者の身に現はれる總べての事は、皆御佛の御旨と思つて、お喜びなされ、

よく得心出来たら、こちらへついて来るがよい。」

と言はれるまゝに、長い廊下をぐる／＼廻つて、御堂の裏の岩山に、面した處の椽側まで来ると、老僧はそこに道枝を座らせました。

道枝は何心なく、左右を見ると、その裏山の岩に面した崖下に、白衣の上に法衣を纏つた數十名の雛僧が、端座して數珠を手にかけて、瞑目合掌してゐます。

道枝はその莊嚴な光景に、打たれた様な氣分になつて居りますと、老僧は扇子を上げて、

「貴女の姪御は、彼處に修業してござる、御覽なさい。」

と言つて、指された方を見上げると、雛僧の座つてゐる所よりも、五六間も高い、苔



蒸した岩石の上に、白衣を纏うて、端座瞑目して合掌してゐるのは、紛う方なき好枝でございます。けれどもその顔は蒼白となつて、血の氣は少しもありません。

體は静物の如く、じつとしてゐて呼吸さへしてゐる様にも見えません。

道枝は餘りの事に、

「あつ!!」

と言ふと、次の言葉も出ずに、恐る／＼眺めて居りますと、老僧は言葉をかけて「いかん。」

と目で制し乍ら、何事か空に向つて、朗々と經文を唱へると、周圍に居並ぶ雜僧達も透通る様な聲で、讀經を始めました。

道枝は兩手に、力一杯こめて、眼を閉ぢて合掌して居りますと、突然きらく／＼とした光りを、全身に受ける様に感じましたので、思はず眼を開いて、岩上の好枝を見上げますと、これは又どうした事でせう。

今迄石の上に端座してゐた好枝が、今は石の上に立上つてゐます。

そしてその周圍には五色の雲が、立て籠めて、半身より下は見る事が出来ません。

どうした事かと、よく／＼見凝めてゐますと、好枝の體は何時しか、神々しい觀音の姿に變つて、その體からは、赫々とした光を放つて、雲に載つたまゝ、次第に岩上から離れて、空中に浮んで參ります。

道枝は餘りの事に、我を忘れて呼びかけようとして、立上らうとしましたが、その體は少しも動かさず、口も利かれせん。

これではならぬ、せめて一言言葉をかけ度い、最後の言葉が聞き度いと、死物狂ひで悶へ焦りましたが、どうする事も出来ません。

その中に微かな、言ひ知れない妙な樂の音が、全山に鳴り響くと、觀音に化した好枝は、道枝の顔に滾れる様な慈顔を送つて、その手から數々の花瓣を地上に散らし乍ら、段々天界へ昇つて參ります。

道枝は今はその樂と、その花の香とに酔はされ、夢に夢見る心持で、合掌しながら空に昇つて行く、好枝を見送つて居りますと、聽て高く／＼昇天して行つて、最後に空の大きな御門が、ぱつと開いて、目醒める様な御殿から、晃々とした光が射しますと、道枝は思はず、



「あれつ!!」

と叫びましたが、好枝の観音様がその中へ入つて終ふと、空の何處にも花の御殿もなく、観音様のお姿も、五色の雲もなく、唯白雲が青空に、棚引いてゐるばかりでございます。

道枝は餘りの事に、はつとすると目が覺めて、邊りを見廻すと、自分は宵に寢た床の中にあつた。やをらむつくりと起上つて見ると、夜はしん／＼と更けて、邊りには人聲も致しません。

道枝は汗を拭き乍ら、

「あゝ、今のは夢だつたのか、どうぞ好枝が明日は、無事で歸つて来て呉れ、ばい、が……。」

と獨り言を言ひ乍ら、又床の間にかけて、観音像に向つて、今更の様にその氣高い姿を禮拜し乍ら、夢は五臓の疲れといふから、大方私の心の迷ひに違ひない。

どうか夢が逆で、明日は無事で歸つて来る様に、どうぞお守り下さいませ。」

と繰返しく念じてゐる中に、早や夜は白々と明け初めました。

朝になつても道枝は、何となく心が怯れて、兄夫婦や春光にも、昨夜の夢の話もせず、朝食をすましましたが、午前十時頃になりますと、思ひがけなく警察から、巡査部長が來られました。

「豫て願ひ出してあつて、搜索して居りました、好枝さんといふ方の事につきましてつい今しがた三州の鳳萊寺の警察署から、電話がかゝりまして、好枝さんといふ方が鳳萊寺の裏山の行者ヶ嶽に籠つてゐられるのを、村人が見付けましたから、すぐに迎へに來る様にと言はれました。」

道枝はそれを聞くと、

「えゝつ? 鳳萊寺の行者ヶ嶽に?」

まあそれは本當でございませうか。」

「詳しい事は分りませんが、それに相違ないといふ事は確實らしいのです。」

「無事でございませうか 好枝は?」

「その事も詳しく解りませんが、まあ無事で居られるでせうなあ。

何か心願があつて、山へ籠られたらしいですね。」



「はい、一人で深く心願する事が、ありましたらしいのでございます。」  
正雄も房枝も春光も、極度に興奮して、お互に顔を見合せるばかりで、口も利きません。巡查部長はその事を知らせて色々手続きについて注意すると、間もなく歸つて行かれました。宮崎家からこの事を山田家へ知らせると、両親も俊夫も和子も、すぐに駆けつけて参りましたが、何れも半信半疑、五里霧中でございます。  
何時までも愚圖々々してゐる場合ではありませんので、直ちに支度を調べて、父正雄、母の房枝宮崎夫妻、俊夫和子の六人が、好枝を迎へて歸るために、總べての用意を調べて、醫者を頼んで速刻鳳萊寺へ向つて急行致しました。

## 行者ヶ嶽

一行の七人は立場を變へて、様々な想像を胸に描き乍ら、その日の午後土地の警察官と村の青年團員に案内されて、谷をあらこちら攀ぢ登つて、漸く鳳萊寺の裏山の見るからに物凄い様な岩の立て籠めた、行者ヶ嶽に着きました。

お互に好枝が無事である事を、一心に祈り續けて、怖る／＼木の根や草の葉につか

まり、漸くその岩屋へ参りますと、一番先頭に歩いて行つた警察官が、怖ろしいものでも見ん様に、岩屋の中を覗いて、

「あつ!!」

と聲を立ちますと、續いて進んで行つた青年も

「あつ!!」

と叫びました、一同は胸を射抜かれる様な思ひで、夢中で駆け寄つて見ますと、好枝は澤山の柴を折り敷いた上に、白衣を着て手に數珠をかけ、前に數冊の經文をおいて後の岩に凭れて坐つたまゝ、息が絶えて居ります。

その白蠟の様な顔に、夕日が輝いて、きら／＼とえも言はれぬ神々しい相を現して居ります。一同はそれを見ると、

「わつ!」

と聲を上げて泣き出すと、後の言葉もなく、聲も惜しまずに啜り泣くのでした。

「もう一日早かつたなら、命を取り止める事が出来たのに、残念な事をした。

好枝! もう一度歸つてお呉れ、お母さんだよ、私だよ。」



房枝が縋りついて、その體を抱き締め、頬に顔を寄せて、涙を注ぎかけると、正雄もたまり兼ねて、好枝の體を搔い抱いて、  
「好枝、お前どういふ考へで、こんな怖ろしい岩の中なんかへ来て、修行をする氣になつたのだ。お願をかけるのも事に依るぢやないか。  
兩親も揃つて居り、兄弟もあり叔父さん叔母さんも、祖父さんもお祖母さんもちやんとしてゐるものを……どんな相談でも出来ない事はなかつたんだ。  
どうしてこんな事をして呉れたんだ。  
もう一遍生き還つて、深い事情を話してお呉れ。  
こんな修行をしなければならなかつた、譯を話してお呉れ。」  
と言つて泣けば、俊夫も半ば失心した如く、好枝の前に蹲まつて、合掌したその手を固く握り、

「好枝、お前どうしてこんな事をして呉れた。  
お前がこんな事になる位なら、僕は死んだ方がどれだけよかつたか知れやしない。  
好技！ どうかお願いだ、もう一遍生き還つてお呉れ。」

と言つて、泣き續けました。

春光も和子もその周圍に蹲つて、好枝の名を呼び續けて、泣き入つて終ひました。  
唯一人道枝はどうした事か、どうしても泣く事が出来ません。  
言ひ知れない悲しい中にも、又一種の言ひ知れない、深い強い大きな喜びが、自分の全身に注ぎ込まれる様な感じが致しました。

生き顔そのまゝに、微笑を残して眠つてゐる、好枝の姿を仰ぎ見ると、昨夜夢に見た事を思ひ合せて、これこそ人間にして、人間ではない觀音様の化身であつた。

私と又世の中の人を濟度をするために現れた、大菩薩に相違ない。  
亡骸はこの岩屋に残されても、御靈は雲に載つて、昨夜あの時刻に、私の魂をこゝへ呼んで、眼前に見せ乍ら、浮世の因縁を悟らせておいて、昇天されたのだ。

あゝ、今こそこの尊い犠牲によつて、私は誠の使命を悟され、それを成就すべき魂を授けられたのだと思へば、泣いてゐる場合でないと、氣がつかますと、道枝は形を改めて、昨夜の夢の次第を、詳しく物語りますと、皆今更の如く驚いて、我知らず好枝の亡骸に向つて、合掌致しますと、不思議や今迄白蠟の様に見えて、全く氷の如く



冷え切つてゐた顔は幾分血の氣が射したかと、思ふと、その鼻からポタ／＼と鼻血が流れて落ちました。

「あつ 鼻血が／＼。」

と騒ぐ人々を残して、其まゝ元の冷さにかへると、ぐつたりと横に倒れて終ひました。敬虔無比なこの光景に打たれて、一同は涙ながらに用意して来た、山籠に遺骸を移して、村の青年達の手によつて、山を昇ぎ下されて參ります。

道枝は後始末をして、岩屋を清め、残された經文を片付けようと致しますと、雑記帳の中に、萬年筆の跡も弱々しく、昨日邊り認めたのか、別離の詩が書いてございませす。六人は驚き乍ら、額を集めてそれを讀んで行く中に、幾度か聲がつまり、涙で文字がうるんで終ひました。

### 哀別の詩

實に現し世は夢なれや

諸行無常は世の常の

人の命の常ならん

我が身地上に生を得て

二十餘年のその間

父母又祖父母はらからの

深き慈愛に包まれて

哺くまれしも凡俗の

たゞ徒らに假初の

浮世の譽れにあこがれて

迷ひの夢を辿りしが

今ぞ御法の聲を聞き

願ひは固き信仰の

神に誓ひを果さんと

心引かるゝ恩愛の

絆を我れと斷ち切りて



野邊の道芝踏み分けて

野越え山越え谷間越え

鳥も通はぬ深山路の

岩間に柴を刈り集め

結ぶ庵も犠牲の

浮世に棲める假の宿

身は俗界を解脱して

身心浄化の我は今

佛の御座に歸依し得て

無思無我無想の境を越え

雲上端座の身なりせば

如何に惡魔の集ひ寄り

猛獸變怪のたかり來て

我が心身を責むるとも

何か恐れん 今は早や

身は神境の雲の上

下は無限の底迄も

上は雲間の空高く

有情無情の限りなく

皆大神の知ろしめす

深き恵みの尊とさを

悟り得しこそ嬉しけれ

さはさり乍ら現し世に

残り給ひし恩愛の

我が父上よ 母上よ

今別れては何時の世に

再び會はんすべもなし

東風吹く野路の山里に



盡きぬ縁のつたかづら

櫻かざして現し世に

歸り行く日を繰返し

今かくと待ちまさん

「親を思ふ心にまよさる親心

今日のおとづれ何と聞くらん」

焼野の雉 夜の鶴

子を思はぬはなしと聞く

まして我が身は限りなき

恵みの中に育てられ

情は深き海山の

我が父君よ 母君よ

老いたる祖父母よ はらからよ

叔父叔母君よ 我が夫よ

此の身の罪を許せかし

天上地上の存命は

神の運命ぞ是非もなし

我徒らに散らねども

委せし神の御手により

さだめなるぞと玉の緒を

断ち切り給ふものならば

如何でつながんすべもなし

明日をも待たで散りて行く

露の命の儂なさよ

せめての名残に今一度

浮世の様を眺めんと

かりの庵を立ち出で

岩間谷間をさまよひて



山の端遠く眺むれば

峯は彌生の東風吹きて  
隣れ夢なく散り來るは

朧月夜の山櫻

遙か下界を見渡せば

まばらに見ゆる燈火の

如何なる人の住みやせん

我肉眼を持つ身には

今ぞ浮世の見納めよ

さらば地上の衆生よ

愛しき人々いざさらば

永久にさきくと祈りつゝ

元の岩間に立ち歸り

庵の前に佇めば

何處の寺の鐘ならん

諸行無常と告げ渡り

谷間の底に響くなり

山深ければ夢路にも

人のおとなふ影もなく

峯の松風音寒く

親にはぐれて夕暮の

木立に迷ふ雛鳥の

父母を尋ねて泣く聲も

いとゞ哀れに身にぞ泌む

月影暗き庵より

高き御空に輝ける

星の光りを仰ぎつゝ

今宵限りの假枕



歸依信仰の御しるしか

姿形は見えねども

夜毎庵に訪れて

法を傳へて御佛の

教へを諭す佛法の

使ひの鳥は夜もすがら

佛法僧と啼き明す

現世衆生の未來をば

皆淨土にと救ひます

佛の御手こそ尊とけれ

地上に享けし人の身は

緑色濃き春の野の

花の姿や草露の

夜半に嵐の吹かずとも

いつか儚なく散る如く

やがて召さるゝ時來れば

跡かたもなく消ゆるなり

我凡俗の身ながらに

永却不滅の生を得て

生れ故郷へ歸り行く

地上の人々いざさらば

我天界に歸るとも

地界の人の幸事を

いつの世までも守るべし

天地に充つる衆生の

愛に輝く白妙の

衣かざして天界へ

故郷高く歸り行く



今日の佳き日ぞ目出度けれ

今日の佳き日ぞ目出度けれ

それを好枝の永遠の遺品と、風呂敷に大切に包んで持つて、一同は夕暮れの山をトボくと麓を指して下りて参りました。

道枝は餘りの悲しさ淋しさ、尊さとも言ひ様のない心持に、胸が迫つて、一同より五六間も離れて、岩山を下りかけますと鳳萊寺の晩鐘が、ゴーンと響いて來ます。周圍に咲き誇つてゐる山櫻の花が、そよよと吹く春風に、はらりと散つて、道枝達の體にかゝります。

道枝は思はず空を仰いで、

「好枝、好枝、しばらくの間丈左様なら……」

弱い私の魂を救ふために、天なる神様は又佛様は、お前の體に現れて、心に焦り續け乍ら、眞の使命の道も見付け出さないで、自ら暗黒の世に迷ひ惱んで苦しんでゐる私を、救ひ出して下さるために、様々の生きた人生の姿と幻とを私に見せて下さつたのだ、お前は人であつても、人間ではなく、眞は菩薩の化身であつたのだ。

いみじき因縁に繋つて、叔母姪と言つて、今日の日までも暮して來た幾年かを振り返れば、懐しいと思ふよりも、勿體ない事であつた。お前は若くして、天來の使命を成就し昇天が出來て、ごの様に満足してゐる事であらう。

親神様は御親ら天國の大門を開いて、お前を迎へ取られた、今からお前は四季の花咲き、妙なる樂の音の響くあの樂園で、如何ばかりか楽しい生活を、永遠に送る事が出来るのか、私には唯それが美しい。

さりとして私はまだどれ程願つても、還る事を許して頂けない、この先私は地上に幾年生きるか、自分には少しも分らない。

それを又知る必要もない、今こそ本當にはつきりと、お前の力に依つて悟りを得た私は、假令残る使命が十年でも三年でも、若しくは三日でも、與へられた命のある間に、自分の天來の使命は必ず成就して、許された時、憧憬の故郷の同じ樂園に還つて行きます、許される日の來るまで、苦しくとも私は生きなければならぬ。

地界は悪魔が荒れてゐる、人の心は眞暗な闇に迷つてゐる。誰か救はなければ、人類は永遠に悪魔のために滅ばされて終ふ、誰が闇に溺れた人



の心を救ふのか、金か地位か権力か、否それは悪魔の武器ではないか。  
 その總べてのものを征服して、世の中を明るく幸福な樂園に作り改めるには、眞の  
 神の愛と、無限な慈悲の御光である天の諸神諸佛は、何故にこれを惜しみなく人類の  
 心に濺ぎ與へて救ひ給はぬのか、若し神に佛に眞の救世の御心あれば、天も地も山河  
 までも、感動して動くまでの偉大なる愛と慈悲の力を求むる者に授け給へ。  
 使命をのみ悟り得て、幾月幾日悶え續けても、それを悉く成就する力もなくば萬年  
 の生を得ることも何の甲斐ある命ぞ。あゝ弱いこの心に、無限の力を與へ給へ。  
 と固く合掌し瞑目して涙にむせびつゝ天を仰いで無我夢中で祈り續けました。

### 手向けの歌

好枝可愛や

又後の世に

巡り合ふやら

逢はぬやら

金よ名譽よ

唯假の世の

夢に被せたる

假り衣

醒めて歸るか

青空高く

父と母との

ふるさとへ

鐘が鳴ります

あの山寺の

諸行無常の

法の鐘

月が出ました

あの山の端に

照せ心の

闇路をば

花が散ります

峯吹く風に

朧月夜の

山 櫻

八雲七色

身は翅衣

登る御空は

星の花

行くも止るも

暫しの別れ

お前天界

わしや地界

## 天界地界

(完 結)



## 筆を擱くに當りて

筆を擱くに當りまして、卷頭の序文で申述べました様に、本書は先に發行致しまして全國の會員から、絶大な御歡迎と御禮讃を受けました書物でございますから、既に多くの方に讀まれて居りますから、新しい讀み物として、何等貢獻する事は出来ません。けれども本書は最初發行致しまして以來、八年後の今日も尙本書を希望される方の絶へない事を思ひます時、如何に本書が、發行當時、全國の愛讀者に歡迎され、又精神修養に貢獻したかといふ事を想像する事が出来まして、著者として、非常な光榮を感じて居ります。次第でございます。

一昨年前篇を發行致しますと、是非後篇を續いて再版せよとの、愛讀者會員のお勧めに依りまして今春再び發行致しました次第でございますが、著者と致しましては、多少内容を、書き改め度いと念願する個所もございますが、今更筆を加へますと、却つて本書の價値を傷ける虞れがありはしないかといふ事を考慮致しまして、本文の内

容をそのままに致しました事を御諒承下さいまして、願はくは、愛讀者諸賢におかせられましては、幾度も繰返し御愛讀下さいまして、本書の内容を充分お掴み下さいまして、將來家庭の主人又主婦として、重要な使命を果されます場合、その他社會の一員として、御活躍下さる場合の、精神的生活の根本資料として、充分御活用下さいませぬならば、著者の光榮これに過ぎたる事はございません。

人は身分の高き賤しき、教養の有無、男女の區別を問はず、唯物質の力や、學力才能及び法律の力のみでは、決して幸福に生きる事は出来ません。

眞の幸福を欲すれば、

常にその心に修養といふ滋養物を攝り入れる事を忘れて居りますと、天魔にその隙を覗はれますから、人は常に心を引き締めて、折さえあれば、心に合掌して、自分の姿と世の中の姿とを心の目で見凝めて過ちのない道を選んで進まなければなりません。人にして眞の信仰なく、眞心なきものは人造の人形と同様で、まさかの時には何の役にも立ちません。

殊に今日の如き未曾有の君國非常時に當りましては平時に比して、幾倍かの、強く



おほ  
大きな明朗な神ながらの信仰の信念を自ら鍛錬して、自ら尊き天祖様と  
おほさま  
大君様の大御寶としての、使命を盡して頂かなければなりません。  
かいわんしよし  
會員諸姉が、今後この大使命をお果しになるための、信念力の種として、本書が萬  
ぶん  
分の一のお役に立つ事が出来ますならば著者の満足これに勝るものはございません。

昭和十四年陽春

著者より

合 掌

## 教育修養雜誌

# 御國の華 道の華

定價一部 金拾貳錢

一ヶ年前納 金壹圓貳拾錢

本誌は一般地方青年處女又主婦の處世及び家事百般の常識修養雜誌として毎月一同發行致して居ります。本誌は普通の雜誌社發行の趣味雜誌とは、全然内容を異に致しまして精神的修養並に實際の常識指導を目的使命として、獻身的に努力致して居ります。



今後國家社會のため、又家庭の一員として完全なる使命を果し、  
 人生最大の幸福を得んと望まれる方は、是非共本誌を御愛讀下さ  
 る事を御勧め致します。

發行所 忠誠婦徳會

岐阜市田生越町

編輯者 片桐龍子

電話二三四五番  
 振替口座名古屋一六三九〇番

忠誠婦徳會發行書籍

日本婦人の使命と	其の修養(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界前編	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界後編	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	眞珠の塔(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
事實談	烈女の鑑(賣切)	中田武雄著	定價金壹圓 (郵稅拾錢)
教育小説	輝く道(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	心の華(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
皇軍慰問日記	國境を越えて(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)



忠誠婦會發行書籍

家庭小説 久遠の愛	聖訓 眞生命の光	皇華聖道寶壽	教育小説 黎明ヶ丘	信仰小説 微笑	國華神道 萬壽華	國華寶典 心身健康秘録	家庭小説 姫かゝみ(賣切)
片桐龍子著	片桐龍子著	片桐龍子著	片桐龍子著	片桐龍子著	片桐龍子著	皇華聖道會編	片桐龍子著
定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)	定價金參圓 (郵稅拾貳錢)	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)

昭和六年九月一日印  
昭和六年九月十日發  
昭和十四年五月十一日再版改訂發行

宗教小説 天界地界 (後編)

【定價金貳圓】(郵稅拾貳錢)

編輯者 片桐龍子  
發行者 片桐龍子

印刷者 河田貞次郎  
岐阜市七軒町十二番地

印刷所 西濃印刷株式會社  
岐阜支店  
岐阜市七軒町十一番地

岐阜市田生越町二一〇八番地

發行所

忠誠婦會

電話 二三五四番  
振替口座 尾古屋一六三九〇番

著作權  
所有



389  
347



終

